名古屋大学図書
20123598

ミケーネ社会からポリス社会への構造転換に関する統合的研究

（課題番号　１６５２０４３８）

平成16年度ー18年度　科学研究費補助金（基盤研究（C））
研究成果報告書

平成１９（２００７）年　３月

研究代表者　**周藤芳幸**
（名古屋大学大学院文学研究科教授）

KAKEN
16520438

1. **研究組織**

研究代表者： 周藤芳幸（名古屋大学大学院文学研究科教授）

2. **交付決定額（配分額）**

平成 16 年度　1,300,000 円

平成 17 年度　1,100,000 円

平成 18 年度　1,100,000 円

3. **研究発表**

[図書]

周藤芳幸『物語　古代ギリシア人の歴史　-ユートピア史観を問い直す-』光文社新書　2004

周藤芳幸『古代オリンピック』（桜井万里子・橋場弦編）岩波新書　2004

周藤芳幸『古代ギリシア遺跡事典』（澤田典子と共著）東京堂出版　2004

周藤芳幸『世界各国史　ギリシア史』（桜井万里子編）山川出版社　2005

Yoshiyuki Suto, *Akoris I: Amphora Stamps 1997-2001*, Kyoto 2005（川西宏幸と共著）

周藤芳幸『古代ギリシア　地中海への展開』京都大学学術出版会　2006

[学会誌等]

Yoshiyuki Suto, "Social Contexts of an Architraval Inscription at Hermopolis: Further Thoughts on the Text and Politics in the *chora* of Ptolemaic Egypt", *SITES: Journal of Studies for Integrated Text Science*, II-1, 2004.

Yoshiyuki Suto, "Archaeology and Cultural Change in Early Hellenistic Middle Egypt: Reconsidering the Wine-making Scene in the Tomb of Petosiris", *JSL* I, 2005, 43-51.

Yoshiyuki Suto, "Text and Quarry in Greco-Roman Egypt: Reading a Dedicatory Inscription Rediscovered at Akoris (IGRR I, 1138)," *SITES: Journal of Studies for Integrated Text Science*, 3-1, 2005.1-14

[報告書]

Yoshiyuki Suto, "Egypt and Aegean in the Archaic Period: A View from the Other Side of the Mediterranean," 桜井万里子編『ギリシアにおけるポリスの形成と紀元前 8 世紀の東地中海世界』（平成 14 年度ー平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告書）2005, 97-108.

周藤芳幸「線文字Ｂと初期東地中海世界のリテラシー」本村凌二編『地中海世界における社会変動と識字率』（平成 13 年度ー平成 16 年度科学研究費補助金成果報告書）2005, 20-30.

[翻訳]

周藤芳幸　P.G.バーン『世界の古代文明』(共訳) 朝倉書店　2004

周藤芳幸　G.ブレンフルト『図説人類の歴史6　旧世界の文明』(共訳) 朝倉書店　2004

[口頭発表]

Yoshiyuki Suto, "Local Epigraphic Habit and the Genesis of Monumental Inscriptions in Ptolemaic Egypt," The Fourth international Conference of the 21st Century COE Program, Nagoya University, 16th September 2004.

Yoshiyuki Suto, "Egypt and the Aegean in the Archaic Period: A View from the Other Side of the Mediterranean", The First Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World: Exploring Archaic Greece, London 18th March 2005.

Yoshiyuki Suto, "Text and Local Community in the chora of Ptolemaic Egypt," The Department of Classics, Stanford University, 4 October 2005.

Yoshiyuki Suto, "Akoris: Excavating a Hellenistic Village in Middle Egypt," The Stanford Archaeological Center Workshop Series, 5th October 2006.

Yoshiyuki Suto, "Framing the Heroic Imagery of Tyrannicides: Visual Representation, Oral Tradition, and the Invention of Public History in Classical Athens," Histoire Fiction Représentation, Université de Provence, Le 24 Octobre 2006.

I　ポリス世界の出発点としてのミケーネ文明

1. 問題の背景

前一千年紀に古代ギリシア文明の揺籃の地となったギリシア本土とエーゲ海島嶼部では、これに先立つ前二千年紀に、クレタ島を中心とするミノア文明と、これより遅れてギリシア本土を中心に展開したミケーネ文明という、豊かな文化内容を誇る二つの先史文明が繁栄していた。古代ギリシア史のもっとも重要な課題の一つは、これらの先史文明、とりわけミケーネ文明と前一千年紀のギリシア文明との関係の解明にある。

古代ギリシア人は、彼らなりに太古の時代に関する様々な伝承を神話として語り継いでいた。たとえば、ヘレネスというギリシア人の総称を、彼らは自分たちがゼウスの怒りによって大洪水が引き起こされた際に箱船に乗って難を逃れたデウカリオン（人類を創造したプロメテウスの息子）とその妻ピュラとのあいだに生まれたヘレンの子孫であることに由来すると考えていた。この神話は、古代ギリシア人のあいだにも西アジアに広く分布する洪水伝説が存在したことを示している点で、きわめて興味深い。

また、前七〇〇年頃にボイオティア地方のアスクラという寒村で暮らしていた叙事詩人ヘシオドスは、『仕事と日』のなかで、黄金の種族から銀の種族、青銅の種族、英雄（半神）の種族を経て、彼自身が生きている鉄の種族の時代にいたる「五時代の説話」を物語っている。ここでは、トロイ戦争の伝承などが、英雄の時代の出来事として認識されていた様子が窺える。

さらに、前五世紀後半の歴史家トゥキュディデスは、その『歴史』の冒頭で、貧しい住民が絶えず移動を繰り返していた時代から、クレタ島のミノス王による海上支配の時代、そしてトロイ戦争とその後の混乱の時代を経て植民活動の時代にいたるギリシアの古史を叙述している。この部分がしばしば「考古学」と呼び慣わされているように、かつてはこのような歴史観が、そのままギリシアにおける古代史の枠組みとして信奉されていたのである。

しかし、近代になると、「デウカリオンの洪水」や「五時代の説話」はもちろん、ホメロスの叙事詩に描かれているような出来事もあくまで神話であって、実際に過去に生起した事件の連鎖としての歴史とは異なるものであるという認識が定着していく。神話と歴史との境界は必ずしも明確ではなかったが、遅くとも一九世紀の半ばまでには、天地創造からトロイ戦争までを神話とみなした上で、いわゆるドーリス人の侵入以降を史実とする歴史観が確立された。これに対して、この神話と歴史との壁を一気に突き崩したのが、シュリーマンによるトロイやミケーネでの一連の発掘である。とりわけ、ミケーネ円形墓域の竪穴墓から出土した莫大な黄金製品は、先史時代のギリシアに独自の高度な文明世界が存在したことを雄弁に物語るものだった。こうして、神話の世界はにわかに歴史の装いをまとわされ、ここに「英雄時代」という新たな時代区分が成立することになる。

ティリンスやオルコメノスでのシュリーマンの一連の発掘に続いて、一九〇〇年からはA・エヴァンズ

によるクレタ島のクノッソス遺跡の発掘が始まり、古代ギリシア文明以前のエーゲ海文明への関心は飛躍的に高まっていった。地中から姿を現した大規模な宮殿遺構や美しい装飾品、色鮮やかなフレスコ画などは、かつては神話と考えられていた世界が確かに実在したことを人々に印象づけた。そして、遺跡を発掘する考古学者の側もまた、このような確信に導かれていたことは、エヴァンズがクノッソス遺跡の大部の発掘報告書に『ミノスの宮殿』というタイトルを冠し (Evans 1921-35)、一九三九年にメッセニアのアーノ・エングリアノスでミケーネ時代の宮殿遺構を発見したC・ブレーゲンがその報告書を『ピュロスのネストール宮殿』と題していることから窺うことができる (Blegen 1966-73)。

もちろん、この間に神話と歴史の混淆ばかりが進められたわけではない。エヴァンズが考古学に果たした最大の貢献は、文字記録から年代決定することが不可能な先史時代に、遺物の型式変化に基づく編年の枠組を与え、これを歴史のなかに取り込んだことだった。これに刺激されて、A・J・B・ウェイスとブレーゲンは、コリントス近郊のコラクウ遺跡からの知見から、ギリシア本土の青銅器時代にも基本的な編年枠を確立した (Wace & Blegen 1916)。さらに、エジプトとの交差年代の検討を通じて、これらの編年枠におおよその暦年が対応させられた結果、エーゲ海には古代ギリシア文明に先行してきわめて独創的な先史文明が存在したことが明らかになったのである。

しかし、これによってギリシア史がそのまま時間軸に沿っていわば縦に拡張され、先史時代と歴史時代とを貫く「長いギリシア史」が認められたというわけではない。実際には、エーゲ海先史文明が新興のディシプリンである考古学によって解明されていったのに対して、前一千年紀の古代ギリシア文明は、確固たる伝統を誇る古典文献学の研究対象となって久しかった。そのため、ミノア・ミケーネ時代研究と古代ギリシア史研究とのあいだには、単に扱う時代の相違だけではなく、深刻な方法論的界面が生じてしまったのである。イギリスの考古学者C・レンフルーはこれを「大分水嶺」と呼んでいるが (Renfrew 1980)、それはエーゲ海先史文明と古代ギリシア文明との類似点よりは、むしろ相違点を際立たせる結果を招くこととなったのである。

考古学は何よりも解釈の学問であるが、研究者が人間である以上、解釈という営みに時代的制約が課されることは否めない。エーゲ海先史文明が発見されたのは植民地主義の時代のさなかであり、当時既に植民地化された西アジアでは高度な古代文明の存在が明らかにされていた。エーゲ海先史文明は、その解明の当初から、植民地の宗主国にふさわしい文明であるべく、過重な期待を背負わされていたのである (Hamilakis 2002)。ミケーネ円形墓域から出土した「アガメムノンのマスク」と呼ばれる黄金の仮面に統一ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世を想起させるカイゼル髭が付け加えられ、クノッソス宮殿が大英帝国のウィンザー城をモデルとして過剰なまでに復元されていったのも、このような時代背景を考慮すればもっともなことだった。「アガメムノンのマスク」の髭がシュリーマンによる贋造ではないかという疑いが提起され、復元されたクノッソス宮殿のかなりの部分が幻想の所産であることが指摘されるようになったのは、ごく近年のことに過ぎない。こうして、何ら考古学的な裏付けがなかったにもかかわらず、ミノア・ミケーネ社会の支配者は、西アジア的な専制君主に対抗することのできる絶対的な王のイメージを押し付けら

れていったのである。

一方で、このような状況は、古代ギリシア文明の研究者のなかに、エーゲ海先史文明に対する違和感をかきたてずにはおかなかった。というのも、古典古代の文明の基盤は構成員の水平的な関係に基礎をおく市民社会にあり、絶対的な王が君臨する社会とは無縁であるというのが、古代ギリシア史研究者のあいだの暗黙の了解事項だったからである。幸いなことに、エジプトとの交差編年からは、エーゲ海先史文明と古代ギリシア文明とのあいだには「暗黒時代」が存在することが判明してきていた。それは、ミノア・ミケーネ文明を古代ギリシア史から遠ざけようとする研究者にとっては、便利なブラックボックス以外の何物でもなかった。ギリシア史は、ミケーネ文明の滅亡をもっていったんリセットされ、つづく「暗黒時代」に古代ギリシア文明が準備されたというわけである。ところが、やがてこのような理解に修正を迫る重大な発見がなされた。それが線文字Ｂの解読である。

エヴァンズによるクノッソス宮殿の発掘以来、クレタ島のミノア文明には三種類の文字体系があることが判明していた。印章などに彫られた聖刻文字、クレタ島各地の遺跡から出土する粘土板に刻まれた線文字Ａ、そしてクノッソス出土の粘土板にしか刻まれていない線文字Ｂである。これらの文字に対しては、さまざまな解読の試みがなされたが、資料の点数が限られていたこともあって、それらはなかなか実を結ばなかった。

ところが、一九五二年になって、これらのうち線文字Ｂが、イギリスのＭ・ヴェントリスによって解読された(Chadwick 1990)。蓋をあけてみれば、線文字Ｂは古い形のギリシア語を表していたのである。しかし、これはセンセーションを巻き起こした。なぜならば、その当時、大半の研究者は、線文字Ｂが表している言語がギリシア語のはずはないと考えていたからである。当然のことながら、それには相応の根拠があった。

ギリシア語は、英語やドイツ語などと同じように、印欧（インド・ヨーロッパ）語として一括される語族に属している。現代における印欧語の特徴のひとつは、それを表記する文字が常に音素からなるアルファベットからなっていることである。英語の場合でいえば、その文字は二六の母音あるいは子音を示す記号からなっており、疑問符やピリオドなどを加えても、文章はすべてこれらの三〇たらずの記号の組み合わせで表記することが可能である（大文字と小文字の区別は比較的新しい現象なので、ここでは考慮しない)。歴史時代初期のギリシア語の場合も、地域によって違いはあるが、その表記には多くても三〇ほどの記号でことたりていた。

ところが、解読をまつまでもなく、線文字ＡもＢも、その記号の総数は通常のアルファベットのそれをはるかに上回ることが知られていた。実は、線文字Ｂの場合には、表記されている言語はギリシア語だったにもかかわらず、その記号は音節文字と表意文字からなっていたのである。多くの研究者が、線文字Ｂの表す言語が印欧語ではないと考えたのも、無理のないことだった。

しかし、それにもかかわらず、ギリシアの遺跡から出土した粘土板に刻まれている文字の表す言語がギリシア語であるという仮説にたどりつくまでに半世紀以上を要した事実は、注目に値する。なぜならば、

それはエーゲ海先史文明が古典期のギリシア文明の直接の祖先であってはならないという暗黙の前提がいかに強固なものであったかを如実に示しているからである。線文字Bの解読は、少なくともギリシア人を定義する文化要素の根幹をなす言語の面においては、もはやミケーネ文明を「ギリシア」から切り離す理由がないことを明らかにした。

こうして、ギリシア語として読むことができるようになった粘土板は、古典期における碑文やヘレニズム時代のパピルス文書のように、同時代の社会を復元するための一次史料として、活発な研究の対象となった。それは、早くも一九五六年にヴェントリスとJ・チャドウィックによって主要な粘土板のテクストの集成が公刊されたことにも示されている(Ventris & Chadwick 1956)。一九六三年には、L・R・パルマーによって新たな粘土板の解釈が提示され (Palmer 1963)、一九六八年には日本でも太田秀通による記念碑的な研究が公刊されるなど (太田 1968)、ミケーネ社会の研究は飛躍的に進展した。しかし、そこでは同時に、看過することのできない問題の病巣も広がりつつあった。それが、言語に代わる新たな断絶の指標としての社会モデルの登場である。

人類学的な考古学の要諦は、モデルの構築にある。とりわけ、考古学において初めて方法論に対して自覚的であろうとしたニュー・アーケオロジーは、モデルの構築、およびそのモデルとフィールドからのデータとのフィードバックを何よりも重視することを提唱した。しかし、モデルは何もニュー・アーケオロジーとともに生まれたわけではない。ほとんどあらゆる考古学的な思考は、それと自覚しないまま一定の時代あるいは個人に内在するモデル (先入観) に照らして展開されてきたのである。ミケーネ社会の研究も、その例外ではない。

この点に関して興味深い指摘を行っているのが、ギャラティとパーキンソンである (Galaty & Parkinson 1999)。宮殿文明の解釈に再考を迫るその編著のなかで、彼らはミケーネ社会の研究には、その初期に参照された二つのモデルが影を落としてきたと主張する。それが、ヴェントリスとチャドウィックによる「中世封建社会モデル」と、フィンリーによる「西アジア社会モデル」である。

解読の当初、ヴェントリス、チャドウィック、パーマーらは、中世の封建制社会を念頭に浮かべながら、その記載内容を検討しようとした (Chadwick 1956)。「宮廷や行政機構を構成する貴族階級が存在するからには、これに次ぐものとして、大土地所有者を中心とする地方豪族階級が存在してもおかしくない・・・。このような社会構造を想定し、このなかにミケーネ時代の官職をはめこもうとする試みがどこまで正当化されるかは確かに問題であるが、しかし、このように想定することでミケーネ時代の官職を解明する手がかりが得られると私は考えている」というチャドウィックの言葉は、そのような方法がきわめて自覚的なものであったことを明示している (Chadwick 1976)。すなわち、彼らは「中世封建社会モデル」を解釈の可能性を広げるための道具として用いていたのであり、実際、チャドウィック自身も、後には「封建的」という表現を撤回してもいる (Ventris & Chadwick 1973)。しかし、このような方法から導き出された社会像は、使命を終えたモデルを離れて、その後も一人歩きを続けているのが現状である。

しかし、学史により深刻な影響を与えることになったのが、フィンリーによる「西アジア社会モデル」

である。粘土板が宮殿の焼け跡から発見されることに注目した彼は、それを古代の西アジアに典型的にみられる宮殿経済が存在した証拠とみなし、1957年の論文では「オルターナティヴな比較の対象は、ミケーネと同時代に存在していた世界、すなわちエジプト、シリア、小アジア、メソポタミアである」と断言した（Finley 1957）。このモデルは、フィンリーにゆかりの深いジーザス・コレッジのキレンに忠実に受け継がれている。「線文字Bから明らかになった社会ともっとも近い関係にあるのは、後のギリシア・ローマ世界の社会ではなく、同時代の、もしくはより早い段階の西アジアの社会である。・・・その後の研究の進展は、この社会の本質が「アジア的」な経済にあるという結論に変更を迫るものではない」というキレンの主張は、この立場を代表するものといえよう。ここで「アジア的」という思わせぶりな呼び方がされている社会とは、もちろんフィンリーが『古代経済』で述べている「耕作地、手工業、交易を独占する巨大な宮殿もしくは神殿コンプレックスが経済活動に卓越」するような社会のことである。

しかし、いったいなぜフィンリーは執拗に「西アジア社会モデル」にこだわったのか？ フィンリーの研究関心から見て、それが古代西アジア社会への関心にもとづくものではなかったことは明らかである。実は、この謎をとく鍵が、先ほどの引用文のなかに隠されている。というのも、そこで「オルターナティヴな比較の対象」と呼ばれているのが、実はホメロスの叙事詩の世界のことだからである。ここで想起されるべきは、フィンリーの名著『オデュッセウスの世界』の初版が1954年に出版されていることである（Finley 1954）。すなわち、この著書の内容にどれほどの創見があろうと、ことミケーネ社会に関する議論に限っては、それは「線文字B以前」の知見に立脚するものに過ぎなかった。しかも、そこでの論旨の眼目は、ホメロスの叙事詩がミケーネ世界とは無関係で、暗黒時代初期の社会を反映しているというものだった。

周知のように、それまで、ホメロスの叙事詩は、ミケーネ時代と歴史時代との唯一の架け橋とみなされていた。フィンリーはこの架け橋を外し、ホメロスを歴史時代にひきつけることで、結果的にミケーネ世界を古典期のギリシア文明から断ち切ろうとしたのである。すなわち、見逃されてはならないことは、「西アジア社会モデル」の真の意図が、ミケーネ社会が同時代の西アジアの社会と似ていることを示すというよりは、むしろそれが後の時代のギリシアの社会とは断絶していることを示す点にあり、それ自体、彼の独特なホメロス的社会論から派生した説だったという点である。実際、たとえば太田秀通氏は、『東地中海世界』のなかで、ミケーネ社会について「しかし、これは広義に解すれば古典古代的生産様式に帰属させてよいであろう」と至当な判断を下している（太田1977）。

もちろん、『オデュッセウスの世界』は、ミケーネ文明が英雄時代そのものであるという安易な同定に警鐘を鳴らした点において高く評価されなくてはならない。しかし、一方において、考古学の側では、近年これまで以上にホメロスの叙事詩にはミケーネ世界の残像が含まれているという見解が優勢になりつつあることも事実なのである。ミケーネのパナギア・ハウスの発掘報告書を刊行したシアの近著は、この傾向を代表するものである（その序文では、彼女もまた10年ほど前まではフィンリー的なモデルに呪縛されていたことが率直に告白されている。Shear 2000）。他方、初期鉄器時代の研究が進展するにつれて、肝心の暗黒時代に関しても『オデュッセウスの世界』は参照すべき研究文献のリストから脱落しつつある。

要点をまとめれば、問題を残しながらも一定の成果をあげ、その使命を終えつつある「中世封建社会モデル」の場合とは異なり、「西アジア社会モデル」は、むしろミケーネ社会をその後のギリシアの歴史から切り離そうとする意図から提起されたものであり、その副作用の影響も甚大である。というのも、このモデルからは、連続論にたつ構造変化のプロセス研究の可能性が、はじめから除外されてしまっているからである。

もちろん、ミケーネ時代の社会を考察する際に、西アジアとの比較という視点はもちろん重要である。見誤ってはならないのは、「西アジア社会モデル」の歴史的性格であり、同時代の西アジアとの関係は、より具体的な考古学的証拠を通して論じられるべきであろう。

2. ミケーネ文明の興隆

アルゴス平野の北東端に位置するミケーネのアクロポリスは、ハボス渓谷の断崖を背に、プロフィティス・イリアスとザラという二つの険しい岩山の懐に抱かれるようにしてその廃墟をさらしている。とりわけミケーネ時代の後期にアクロポリスの中腹にめぐらされた重厚な城壁は、先史時代のミケーネの威風を余すことなく伝えている。メガロンと呼ばれる宮殿主体部からは、南西に向かっては歴史時代におけるこの地域の中心地アルゴスとその彼方のアルゴス湾を、北西に向かってはコリントス方面へとつづく丘陵の起伏を望むことができ、天然の要害としてのミケーネの重要性を実感することができる。

ミケーネは、伝承では呪われたアトレウス一族の支配の座であり、とくにトロイア戦争に際してギリシア連合軍の総帥をつとめたアガメムノンの居城として有名である。ホメロスは、ミケーネに対して「黄金に満ちた」という形容句を添えているが、それはヒッサルリク（トロイア）で「プリアモスの宝」をはじめとする黄金製品を発見し、トロイア戦争の史実性への確信を深めていたシュリーマンの関心を惹きつけることになった。しかし、ヒッサルリクの場合とは異なって、ミケーネやティリンスの場合、遺跡そのものの重要性は、シュリーマンが発掘する以前から広く知られていた。二頭のライオンが円柱に向かい合うレリーフで飾られた主門（いわゆる「ライオン門」）や、「アトレウスの宝庫」と呼ばれるトロス墓には、早くもローマ時代にパウサニアスが『ギリシア案内記』のなかで言及してからである（Paus. 2.16）。

後二世紀にミケーネを訪れたパウサニアスは、王妃クリュタイムネストラと姦夫アイギストスが城外に葬られているのに対して、アガメムノンらの墓が城壁の内側にあると述べている。実は、シュリーマンの時代には、ここでいう城壁は先史時代のアクロポリスの城壁ではなく、その外側にある歴史時代の市壁を指しているという見解が学界で主流を占めていたのだが、それはアカデミズムの外で育ったシュリーマンのあずかり知るところではなかった。印象的な先史時代の城壁を目にした彼は、これこそパウサニアスのいう城壁に違いないと判断し、そのすぐ内側を発掘地点に選んだのである。

シュリーマンが発掘した円形墓域は、城外の西方でギリシア人考古学者のミロナスらによって一九五〇

年代に発掘されたもうひとつの円形墓域（円形墓域Ｂ）と区別するために、現在では円形墓域Ａと呼ばれている。円形墓域Ａは、アクロポリスの城壁が建造される過程でたびたび改変が施され、最終的には西側をテラスによって補強された上に二重の板石によって環状に囲まれた。しかし、本来は全部で六基（そのうち、シュリーマンが発掘したのは五基）の竪穴墓が掘り込まれた円形の塚であった可能性が高い。これに対して、円形墓域Ｂも、もとはやはり円形の塚だったが、そこに営まれた計二五基の墓のうち、構造的に竪穴墓とみなすことができる例は一四基にとどまり、円形墓域Ａと較べるならば、その副葬品は質量ともに貧弱である。

年代的には、円形墓域Ｂに属する墓は中期青銅器時代の後半から後期青銅器時代の最初期に、円形墓域Ａの竪穴墓は中期青銅器時代の最末期からミケーネ時代の初期におくことができる。しかも、この時代には、建築遺構などの考古学的証拠はきわめて乏しい。したがって、これらの墓域には、ミケーネ文明の成立過程を解明するための重要な鍵が隠されている。

ミケーネの二つの円形墓域のように、その内部に複数の埋葬施設を含む青銅器時代の円墳は、一般にトゥムルス墓と呼ばれている。トゥムルス墓の系譜をめぐってはさまざまな議論があるが、ギリシアではレフカダで初期青銅器時代に遡るトゥムルス墓も知られているので、ミケーネの円形墓域についても、その系譜を外部ではなくギリシア内部でたどることが可能である。中期青銅器時代のトゥムルス墓は、アルゴス平野ではアルゴスやデンドラなどでも見つかっており、後者では戦車を牽引する馬も埋葬されている（Protonotariou-Deilaki 1990）。

ところが、トゥムルス墓に付随する埋葬施設としては土坑墓や甕棺などが一般的であり、ミケーネの円形墓域のように深い竪穴墓が設けられる例は珍しい。竪穴墓とは、まず四角形の深い竪穴を地山に掘り込み、そのなかに遺骸と副葬品を安置し、竪穴の途中に設けられた壁の段に木材の梁を渡して埋葬空間を塞いでから、竪穴の残りの部分に土砂を入れるタイプの墓を指す（図　）。竪穴墓ではしばしば追葬が行われているが、その際には竪穴の埋土がいったん掘り出され、梁を外して墓室に遺骸を埋葬してから、ふたたび竪穴を埋めるという方法がとられた。ミケーネの場合、墓の上には墓碑が立てられていたが、このタイプの墓の場合には、やがて追葬が行われなくなり、墓碑が原位置から動いたり引き抜かれたりすると、墓の場所は地表面からはまったく分からなくなってしまう。ミケーネ時代の後期に築かれた環状列石が本来の塚のサークルとずれているのも、その証拠と考えられる。円形墓域Ａの竪穴墓が盗掘を免れたのは、このような構造上の特徴によるところが大きかったのであろう。

トゥムルス墓という葬制の場合と同様に、竪穴墓という墓の形態の起源についても、様々な議論がある。しかし、近年ではエギナをはじめとするいくつかの遺跡で中期青銅器時代の竪穴墓が知られるようになってきているため、トゥムルス墓ばかりではなく竪穴墓という埋葬施設の系譜もギリシアの内部でたどることが可能になってきている（Kilian-Dirlmeier 1997）。

竪穴墓の構造上の特徴が中期青銅器時代の葬制に根ざしていることを認めるとしても、容易に説明することができないのは、中期青銅器時代の一般的な墓とは隔絶した副葬品の量と質の豊かさである。たとえ

ば、竪穴墓からの遺物を特徴づける膨大な黄金製品であるが、そもそもこれらの材料となった金は、いったいどこからもたらされたのだろうか。

エーゲ海では、金は少量ながらシフノス島などで産出し、初期青銅器時代にはすでに、ルーヴル美術館に展示されている伝アルカディア出土の黄金のソースボートのような金製容器も存在する。しかし、ミケーネ円形墓域Aの竪穴墓に葬られた遺骸の顔に被せられていたマスクや、副葬された装飾品、印章などの金製品は、その量において際立っている。カロによれば、竪穴墓III、IV、Vだけで、金の総量は約十三キログラムにのぼると試算されているのである（Karo 1930-33）。それは、この地に拠点をおいたミケーネ時代最初期の支配層が、何らかの経緯によって膨大な金を手にしていたことを物語っている。

有力説のひとつは、これらの金がエジプトからもたらされたと考える。ミケーネに竪穴墓が築かれるようになった頃、海をはさんだエジプトでは、異民族ヒュクソスによる支配を脱するための戦いが繰り広げられていた。ミケーネの戦士たちは、傭兵としてこのヒュクソス撃退に参加し、その褒賞としてファラオからこれらの金を与えられたのではないかとするのが、この説の骨子である（Marinatos 1960）。同時代のサントリーニ島アクロティリ遺跡でナイルの風景がフレスコ画に描かれていることは、ミケーネ文化の影響下にあったエーゲ海の人々がエジプトと往来していたことを示している。さらに、エジプトから明らかにミケーネ文明の戦士を描いていると解釈されるパピルスが出土していることも、この仮説には有利な証拠となる（Davies & Schofield 1995）。なお、現在主流となっているエーゲ海の高編年（サントリーニ島の爆発を前一六二八年頃とする編年観）を受け入れるならば、竪穴墓の年代はヒュクソス撃退よりも一世紀ほど古くなるため、この説は根本から成り立たなくなる。ただし、ヒュクソスがエーゲ海と深い関係をもっていたことは、デルタのテル・エル・ダバアから発見されたエーゲ海様式のフレスコ画からも明らかである。これらの証拠を総合して考えれば、竪穴墓の黄金がエジプトから搬入された可能性は依然として高いと考えられる。

これに対して、もう一つの仮説は、これらの黄金がパンガイオン金山などからの豊富な金の産出を誇る北ギリシアに由来するのではないかと考える。時代は千年も新しくなってしまうが、マケドニアのシンドスで発掘された古典期の墓域からは、ミケーネの例を彷彿とさせる黄金のマスクがみつかっている。遺骸に金のマスクを被せる習慣は、ミケーネ時代にはミケーネの円形墓域でしか知られていない特異なものであり、千年も後の北ギリシアで観察される同一の習慣との関係は謎に包まれている。しかし、ミケーネの円形墓域でも、またシンドスの墓でも、北方のバルト海沿岸部でしか産出しない琥珀のネックレスが副葬されている事実は、注目に値する。

いずれにしても、円形墓域と竪穴墓という葬制が在地の文化伝統の上に立っているのとは対照的に、黄金と琥珀、そしてアフリカに由来すると考えられる駝鳥の卵を転用した壺などの豪華な副葬品は、ミケーネ文明最初期の支配層が、当時の国際的な威信材の交換網のなかに身をおいていたことを示唆しているのである。

ミケーネ時代初期の支配層の王権の性格を考える上で重要なのが、戦車である（Crouwel 1981）。馬によ

って牽引された二頭立ての戦車は、前二千年紀の西アジア世界に流行した最新兵器だった。エジプト新王国のラメセス二世とヒッタイトとが雌雄を決すべく戦火を交えたカデシュの戦いは、古代最大規模の戦車戦として歴史に名を残している。

文化要素としての戦車は、エーゲ海地域ではミケーネ時代の初期にはじめて確認される。ミケーネでは、円形墓域Aから十一点、同じくBから二点の墓碑が出土しているが、そのなかで浮彫のデザインを判読することのできる六点中五点が戦車をモティーフとしている。副葬品の金の印章にも、弓を構えた戦士と御者とが乗り込んだ典型的な戦車の図柄が表現されたものがある。そのために、ドリューズのように、ミケーネ文明の成立は戦車戦術に長けたインド・ヨーロッパ語族に属する少数エリートの乗っ取りによって実現されたという斬新な説を唱える研究者もいる（Drews 1988）。

たしかに、ミケーネ円形墓域からの遺物の他にも、ドリューズが指摘するように、アッティカにあるマラトンのトロス墓の通路部分に陪葬された二頭の馬から、トロイアの木馬の伝承にいたるまで、ミケーネ時代のギリシアには馬と戦車が重要な意味をもっていたことを示す証拠が少なくない。しかし、とりわけ戦車について留意すべきことは、険しい地形を特徴とするギリシアにおいては、戦車はほとんど実戦に役立たなかっただろうという点である。戦士を運ぶためであれ、実際に戦車戦を行うためであれ、戦車を実地に走らせるためには専用の平坦な道路を構築しなければならず、後述するように、実際にミケーネ周辺ではそのような道路の痕跡が確認されている。しかし、問題は、なぜそこまでして戦車を用いなくてはならなかったかである。

おそらく、ミケーネ時代における戦車は、実用的な武器というよりは、支配者の地位と密接に結びついた象徴としての意義の方が大きかったと考えられる。このように、ミケーネ円形墓域の被葬者たちは、竪穴墓の副葬品に見られる物質文化の面においてだけではなく、精神文化のレヴェルにおいても、当時の国際的なスタンダードのもとに身をおいていたのである。

3. 王権と社会構造

ミケーネで支配層の墓として竪穴墓が用いられていたのは、絶対年代では前１７世紀の後半から前一六世紀のことと考えられている。しかし、並行してペロポネソス半島の南西部では、この頃からミケーネ文明に独特の墓の形態であるトロス墓が発展し、やがてそれはこの世界を構成していた諸王国における王墓の新たなスタンダードとなった。

日本の横穴式石室を想起させるトロス墓は、細長い通路部分（ドローモス）、扉で塞がれる入口部分（ストミオン）、そして埋葬施設である主室（トロス）からなっている。トロスとは円形の建築物の総称であるが、トロス墓の主室はヴォールト状にせりあがり、頂部にはキャップストーンがはめられている（「蜂の巣形の墓」という一般的な呼称は、この墓室の独特の形状に由来している）。ミケーネ世界で最大規模のトロ

ス墓であるミケーネの「アトレウスの宝庫」では、入り口部分の両側に装飾として半円柱が据えられるなど、装飾的な要素も加味されている。

トロス墓の起源については、しばしば初期青銅器時代のクレタ島の「トロス墓」との関連が指摘されるが、年代的にも構造上の特徴の面でも両者の隔たりは大きい。仮に、円形の石造墓というアイディアがクレタ島からもたらされたことを認めるにしても、それがミケーネ時代の初期に支配層の墓として採用されるにあたっては、大きな変化が加えられたようである。クレタ島で初期青銅器時代から営まれたトロス墓は、集落の構成員が何世代にもわたって次々に葬られる合葬墓だった。肥沃なメサラ平野にあるカミラリやプラタノスのトロス墓は、その代表的なものである。クレタ島のトロス墓には低い開口部があるだけで独立した通路はなく、地上にむき出しになった墓室の前には、祭祀のための施設がおかれていた。副葬品の量も、埋葬例の多さを考慮すれば、決して豊かとはいえない。

これに対して、ミケーネ文明のトロス墓は、全体に規模が大きく、ファサードが強調されているのが特徴である。初期のものでは石造部分は墓室だけにとどまるが、やがて通路部分の両側も石材で構築されるようになる。メッセニアのペリステリアやアルゴス平野のコクラにあるトロス墓のように盗掘を免れた例から判断するならば、副葬品の内容はきわめて豪華なものだったらしい。クレタのトロス墓が共同墓地であったのと比べれば、ミケーネ文明のトロス墓は、まさに王者の奥津城と呼ぶにふさわしい埋葬施設だったのである。

トロス墓という葬制が、メッセニアから各地に伝播するにしたがって社会の最上層に占有されるようになったことは、ミケーネ時代におけるもうひとつの基本的な墓の形態である岩室墓の分布状況からも推測することができる。岩室墓とは、通路・入り口・墓室という、基本的にはトロス墓と共通するプラン（ただし、墓室の形態は多様である）の墓を、岩盤に直接掘り込んだものであり、ミケーネ文明の及んだ範囲に広く分布している。

ミケーネ文明の中心地であるペロポネソス半島では、トロス墓の発祥の地であるメッセニアを除き、ひとつの集落遺跡にトロス墓が通常は一基しか構築されることがない（ミケーネだけは例外で、九基ものトロス墓が存在する）のに対して、岩室墓は数十基が群集しているのが通例である。おそらく、トロス墓の構築が支配層にしか許されていなかったために、その下に位置する有力家系の人々は、これを岩室墓で模倣することを余儀なくされたのであろう。リンテル上の三角形の開口部をも含めてトロス墓の特徴を忠実に再現したペラナ（ラコニア北西部）の 2 号岩室墓のような例は、トロス墓の特権的な性格をよく示している。

しかし、この時代の社会における階層差が、すべての王国でトロス墓と岩室墓という葬制の違いに反映されていたわけではない。たとえば、中部ギリシアを例にとると、オルコメノスではミケーネの「アトレウスの宝庫」に比肩するミケーネ文明圏で最大規模のトロス墓が存在するにもかかわらず岩室墓は皆無であり、逆にテーベでは膨大な数の岩室墓が発掘されながらトロス墓は見つかっていない。アッティカでは、アテネを含む西半分に岩室墓群が点在するのに対して、東岸のマラトンとトリコスでは、トロス墓は岩室

墓ではなくトゥムルス墓を伴っている。このような状況は、王国ごとに葬制にもかなりの地域性があったことを窺わせている。

竪穴墓からの豪華な副葬品、そして石造建築の高度な技術を駆使したトロス墓は、それだけをとって見れば、たしかに同時代の西アジアの列強、すなわちヒッタイトの王やエジプトのファラオを想起させる強力な王権の体現者がミケーネ時代のギリシアにも君臨していたかのような印象を与える。しかし、さらに葬制の諸相を具体的に検討するならば、それが必ずしも正鵠を射るものではないことは明らかである。

まず、竪穴墓の場合にもトロス墓の場合にも共通するミケーネ時代の葬制の顕著な特徴は、個々の墓がほとんど常に複数の被葬者を前提に構築されていることである。円形墓域Aの場合には、その副葬品の内容の検討から、それらが比較的短い期間に獲得されたと推測されている（Wright 1995）。ところが、これらはあくまで全部で二〇人（男性八人、女性九人、小児二人）の被葬者のために副葬されたものなのである。しかも、大量の黄金製品が出土したIV号墓の場合には、短期間に五人もの男性が追葬されている。追葬にあたって先の被葬者の遺骸とその副葬品が無造作に壁際に押しやられていることも、竪穴墓では支配者個人よりもその家系（より正確には、おそらく擬制的な系譜を共有するエリート集団）の連続性が重視されていたことの傍証である。

被葬者の複数性は、トロス墓の場合も同様である。しかも、トロス墓の場合、墓室そのものの規模とそれが与える威圧感とは対照的に、実際に遺骸を納めた埋葬施設については一般に不明であるばかりか、埋葬施設が発見されている場合でも、それらは簡素な土坑墓に過ぎない場合が多い。例外はミケーネの「アトレウスの宝庫」とオルコメノスの「ミニュアスの宝庫」であるが、前者の場合でも埋葬施設に相当すると考えられる副室部は、何ら内装が施されていない（後者の場合は、副室天井部が美しい渦巻文のレリーフで装飾されている）。さらに、トロス部床面に土坑墓が掘り込まれている場合でも、複数のそれらのうちのどれかが中心に位置することはほとんどなく、構築の当初から追葬が前提とされていたことを示している。

また、初期のトロス墓は、メッセニアのヴォイドキリアで典型的に見られるように、しばしば中期青銅器時代以来のトゥムルス墓に埋め込まれる形で構築されている。その結果、メッセニア各地で見られるように、それらの外形はマウンド状を呈していた。通文化的には、王権の表象としてのマウンドはその地域のランドマークとなる一定の規模を誇っていることが多い。ところが、ミケーネ文明の場合には、トロス墓は時代とともにマウンドとしての外形を喪失し、次第に丘陵の緩斜面に構築されるようになってしまう。この点もまた、トロス墓でさえ絶対的な力を誇示する王の墓所とは断言しきれないことの証拠といえる。

このように、葬制から判断する限り、ミケーネ文明の社会で最上層に位置していたのは、王権の本質をなす権威と権力とを一身に体現した単数形の「王」ではなく、特定の墓を共有することで一体感を顕示していた複数形の「集団（地域エリート層）」であったとことが推測されるのである。

葬制から窺うことのできる王権の限定的な性格は、宮殿の構造とも対応している。ミケーネ文明の宮殿は、同時代のヒッタイトなどと比べればもちろんのこと、時代的に先行するクレタ島のミノア文明の宮殿

と比べても、主体部だけをとれば、著しく規模が小さかったようである。にもかかわらず、ミケーネ文明の宮殿が巨大な印象を与えるのは、それらの多くが前一三世紀にキクロペス様式の城壁によって囲まれたことによる。

構造面に目を向けるならば、ミケーネ文明の宮殿は、広場を中心に機能分化したブロックから構成されたミノア文明の宮殿よりも、たしかに求心的な構造を特徴としている。宮殿の中心にあるのは、四本の柱によって支えられた広い部屋で、その中心には宗教的な儀礼に用いられた炉が据えられていた。「玉座」は、ピュロスのようにこの部屋の壁際におかれるのが通例だったらしい。この炉を中心とする部屋と、その前室および玄関部分が縦一列に並ぶ平面プランはメガロン形式と呼ばれている。

このような宮殿の求心的な構造は、ミケーネ時代の後期になると、さらに徹底されていったらしい。ピュロスでは、宮殿が焼壊する直前の段階には、宮殿主体部へのアクセスは二か所に限定され、工房も宮殿から直接管理することの可能な地区に集中させられていた。ミケーネ、ミデア、ティリンス、グラ、クリサなどの遺跡では、このようなプロセスが宮殿の城塞化と軌を一にしていたと考えられる。

しかし、このようなミケーネ文明の宮殿が、先行するミノア文明の宮殿と何ら共通点をもっていなかったわけではない。いずれの文明の場合にも、宮殿のおもな機能は物資の貯蔵とその再分配にあった。宮殿は、いわば管理機構をともなう巨大な倉庫だったのである。ギリシアのように山がちで小環境の豊富なところで一円的な領域支配を実現するためには、領域内に偏在する資源の効率的な再分配が不可欠である。あえて図式的な説明をするならば、おそらく、そのような再分配が社会の構成員の宗教的・政治的合意によって実現されていたのがミノア文明の世界であり、そこに西アジア的な支配・被支配の原理を外挿することによって構造的な強化をはかったのがミケーネ文明の世界だったということになろう。

しかし、そのようなミケーネ文明のもとにあっても、王権は決して十全な発達を遂げるにはいたらなかったようである。その代わりに発達したのが、記録文書による経済活動の管理システムだった。線文字Ｂというミケーネ時代に独特の文字体系も、そのようなシステムが生み出したものだったのである。

線文字Ｂとは、クレタ島のミノア文明のもとで成立した線文字Ａという文字体系を、ギリシア語が表記できるように改良したものである。線文字Ｂがアルファベット（音素を示す記号）ではなく音節文字と表意文字から構成されているのは、線文字Ａの特徴をそのまま継承したためであろう。音節主体の線文字Ｂでギリシア語を表記しようとすると、語末の子音の扱いなどさまざまな問題が生じるが、当時の宮殿の書記たちは、その扱いにはそれほど困難を感じていなかったらしい。というのも、線文字Ｂは複雑な文学テクストを記述するためのものではなく、物資の品目と数量を記録するための道具に過ぎなかったからである。

しかし、たとえばコンビニのカウンターで受け取るレシートの背後に、精密に統御された膨大な物流システムが広がっているように、一見して無味乾燥な線文字Ｂの粘土板や封印の記載内容も、当時の王国の特殊な性格と深く結びついていた。ミケーネ時代のギリシアには、おそらく二〇から三〇ほどの小王国が存在していたが、これらはいずれも「再分配システム」と呼ばれる経済構造の上に成り立っていたと考え

られている。「再分配システム」とは、E・R・サーヴィスらが提唱する新進化論の枠組において、いわゆる首長制社会に固有の経済構造とされるものであり、領域内のさまざまな産物が恒久的な中央調節機関のもとに集中され、そこから需要に応じて各地に分配されるという双方向的なプロセスの卓越を特徴としている。粘土板の多くが物資の受け取りと分配のリストであること、またミケーネ文明の宮殿がミノア文明の宮殿と同様に物資の貯蔵機能を重視していたことは、いずれも当時の社会が「再分配システム」を経済的な基盤としていたこと、そして線文字Bもこのシステムを効率的に機能させるために導入されたことを物語っている。

線文字B粘土板文書の記録対象は、きわめて多岐にわたっている。そこからは、穀物などの食料や土地、布、武器、青銅、奴隷集団など、経済生活のほとんどありとあらゆる側面が宮殿によって管理されていた様子が窺える。ミケーネ世界の繁栄は、まさに宮殿の統制力にかかっていたのである。諸宮殿が前一二〇〇年頃に環東地中海世界を襲った混乱のなかで破壊され、その後は二度と再建されることがなかったのも、宮殿中心の行きすぎた統制経済システムが、その頃までにはもはや急激な文化変化に耐える柔軟性を失ってしまっていたためと考えられる。

ミケーネ時代の王権と社会構造の検討にあたって看過できないのが、ギリシア各地に残されているこの時代の大規模な土木事業の痕跡である。K・ヴィットフォーゲルがその『オリエンタル・デスポティズム』のなかで詳細に論じているように（Wittfogel 1957）、治水灌漑に代表される大規模な土木事業は強力な王権とそれを支える専制官僚制が成立する重要な契機と考えられてきた。この説の当否はさておき、大規模な土木事業がほとんど行われることのなかった歴史時代とは対照的に、ミケーネ時代のギリシアで道路やダムの建設や運河の掘削などが活発に展開されたことは注目に値する。

ミケーネ時代の土木事業でもっともよく知られているのは、中部ギリシアのコパイス湖干拓事業である。ギリシア本土には、険しい石灰岩の山に四方を囲まれた内陸盆地が点在している。これらの多くは、降雨や雪どけによって流入する水の盆地外への流出を石灰岩の自然の亀裂（カタボスロス）に依存しているため、近代の治水事業によって人工的な排水路が整備されて安定した耕作地に転換される以前は、雨期には湖や沼沢地となっていた。コパイス湖はその代表的な例であるが、J・クナウスらによる緻密な地域調査にもとづく水利工学的研究は、この地がミケーネ時代に干拓され肥沃な耕地へと転換されるにいたったメカニズムを解明することに成功した（Knauss 1987）。

それによれば、中期青銅器時代には、コパイス湖周辺の集落は、その領域の端部に堤防（ポルダー）を設けることによって、冬期に耕作地が冠水するのを防いでいた。ところが、前二千年紀の中頃に、このシステムはおそらく気候変動にともなう降水量の増大によって破綻をきたした。これに対して、ミケーネ時代になるとコパイス湖の北辺を総延長二五キロメートルにわたって貫流する大規模な運河が掘削された。ケフィソス川によってフォキス地方から流入する水がこの運河によって遅滞なく排水されるようになった結果、コパイス湖は恒常的な平野へと姿を変えたのである。

コパイス湖の場合、中期青銅器時代とミケーネ時代とでは、治水事業を遂行する主体の性格は大きく異

なっていたと考えられる。中期青銅器時代の堤防建設は、あくまで個々の集落によるばらばらな対応策に過ぎなかった。これに対して、ミケーネ時代の大規模な運河の掘削は、それらを統括する上位の政治単位がイニシアティヴを発揮しなければ遂行できない性格のものだった。この政治単位の中心地が、大規模なトロス墓のあるオルコメノスであったことに異論はないだろう。

しかし、このような事業の存在をもって直ちに専制的な王権の証拠とすることはできない。伝承上のオルコメノス王ミニュアスについて、パウサニアスは「ミニュアスは莫大な収入を得て、富の点で先人を軒並み凌駕した」と述べているが（Paus. 9.36）、これはあくまでローマ時代に生きた旅行案内記作家による合理化された解釈に過ぎない。むしろ、オルコメノスの富強を伝える最古の史料である『イリアス』の一節で、アキレウスが「たとえオルコメノスの収入総額に相当する富をもってしても」と述べて（Il. 9.381）、オルコメノス王の個人名には言及していないことには注意が必要である。

近年のミケーネ時代の道路網の研究は、それがかつて考えられていたような王国間を結ぶ戦車のためのハイウェイだったのではなく、むしろ王国内部における物資の運搬のために築かれたことを明らかにしている（Jansen 2002）。確かに、領域の経済的な繁栄が結果として王権の強化につながった可能性はあるが、コパイス湖の干拓やティリンスのダムの構築が、領域内部にあるコミュニティの経済的な安定を第一の目的として行われたことは、これらの土木事業が必ずしも専制的な王権のイニシアティヴによるものではなかった可能性を示唆しているのである。

4. 東地中海世界とミケーネ文明

前二千年紀の後半、強力な王権を戴く西アジアの列強諸国は、相互に政略結婚を含む活発な外交関係を維持していた。それらを伝える文書のなかには、アヒヤワのようにミケーネ文明圏に属する王国との関連が繰り返し指摘されている地名も登場するが、その地理的な同定をめぐっては現在もなお議論が続いている。

その西アジアとエーゲ海との文化交流の展開については、H・カンターによる先駆的な研究（Kantor 1947）以来、活発な議論が続けられている。そこでは、エーゲ海で出土する西アジア由来の遺物（オリエンタリア）や西アジアから夥しく出土するミケーネ土器などを分析対象として、両者のあいだで結ばれていた交易の性格などが検討の課題となってきた（Cline 1994）。

考古学的証拠のなかには、ミケーネなどから出土しているアメンヘテプ三世のカルトゥーシュが刻まれたファイアンス板のように、歴史的な観点からもきわめて興味深い遺物が存在する。奢侈品などの場合とは異なり、このような遺物は交易などの経済活動に由来するものではなく、公的な外交関係の結果としてもたらされた可能性が高い。それは、エジプトからの使節のルートを記録したものではないかと解釈されているアメンヘテプ三世葬祭殿の「エーゲ海リスト」と並んで、少なくとも前一四世紀前半にはミケーネ

文明の諸王国の支配者とエジプトのファラオとのあいだに公的な関係が結ばれていたことを明示している。このような解釈があたっているとすれば、ミケーネ文明世界の王権とエジプトの王権とのあいだには、相互に外交の相手として認めあうことのできる関係が成立していたことが推測される。

この関係を探求する上で参考になるのが、水中考古学の成果である。エーゲ海やアナトリアの南岸沖の海底からは、しばしばこの時代に難破して沈んだ交易船が発見され、そこから引き揚げられた遺物は当時の地中海交易の実態の解明にあたって貴重な情報を提供している。とりわけ、アナトリア南西部に位置するウルブルン沖で発見された沈船の場合には、約一〇トンの銅、一トンの錫をはじめとする膨大な量の高価な物資が搭載されており、それがフリーランスの商人による私的な交易船というよりはむしろ支配者の贈与交換にかかわる御用船であった可能性が指摘されている（Pulak 1997）。しかし問題は、それらの物資が果たしてどのような相手との贈与交換を前提としていたのか、という点である。

ウルブルンの沈船は、シリア・パレスティナ方面から出航した後、キプロス島を経由してアナトリア南岸を西へ向けて航海している途中に難破したらしい。問題はその目的地であるが、このルートの延長上に位置する有力な港湾都市としてまずその候補に挙げられるのは、クレタ島のメサラ平野にあるコモスである。メサラ平野は初期青銅器時代から土地の肥沃さを背景に集落が繁栄し、ミノア文明の時代になるとフェストスやアイア・トリアザに宮殿もしくはそれに相当する規模の拠点集落が営まれていた。リビア海に面するコモスはこの平野における唯一の海への玄関口として発展したらしく、そこではキプロス産はもとより、エジプト産やカナン産の土器片も出土が確認されている。

しかし、もし目的地がクレタ島だったと仮定するならば、そこには西アジアとこれほどの物資を贈与交換することのできるような王が存在したのだろうか。ウルブルンの船が沈んだのは前一四世紀の末であるが、この頃のクレタ島では、ギリシア本土勢力侵攻以来のクノッソスを拠点とする一円的な支配体制は揺らぎ、物質文化の面では地域性が顕著になってきている。したがって、状況証拠から判断する限り、エジプトの貴族墓に朝貢のシーンが描かれた前一五世紀ならばいざしらず、この時期のクレタ島に西アジアの王と肩を並べる強力な王権の存在を想定することは困難である。近年、贈与交換のような非経済的な動機にもとづく物資の移動を過度に強調するプリミティヴィスト的立場には批判が寄せられるようになっているが、ウルブルンの沈船のような場合でも、商業的な交易にかかわる船であった可能性は依然として排除できないであろう。

それでは、東地中海というコンテクストに位置づけ直すとき、これまで見てきたようなミケーネ文明の特性から、ギリシア文明の起源に関してどのような洞察を導くことができるだろうか。まず注目されるのは、ミケーネ世界のなかにはすでにポリス社会へと連続していく社会構造の特徴が少なからず芽生えていたと推測される点である。宮殿遺跡やトロス墓の分布から判断する限り、ミケーネ時代には後代のポリスをはるかに越える大きさの領域をもつ王国はほとんど存在しなかった。それらは、同時代の西アジアの王国とは比較にならないほど規模が小さかったのである。精神的な側面においても、線文字Ｂ粘土板には後代と共通する神々の名が現れるばかりでなく、神々への奉納品のリストも歴史時代の供犠暦の記載内容と驚

くほど似通っている。エレウシス（メガロンB）やエピダウロス（アポロン・マレアタスの聖域）からの知見は、ミケーネ時代には既に後代とほぼ同一の供犠習慣があったことを示している。部族制の問題など、今後の解明をまたなくてはならない部分も少なくないが、ミケーネ文明を歴史時代のギリシア文明と切り離して把握しようとすることは正当な考古学的根拠を欠いていると言わざるをえない。

たしかに、トロス墓のようにポリス社会には現れることのなかった大規模な墓の存在は、その背後にポリス社会とは異なる方向への社会の階層化が進んでいたことを示している。しかし、このような葬制の特徴もまた、通文化的な視点に立つならば、ミケーネ世界とポリス社会との断絶ではなく連続性を示す一つの根拠となりうることは、あまり注目されていないのではないだろうか。通文化的には、トロス墓のように支配者が自らの威信を社会の構成員に印象づける目的で構築する大規模な墓は、初期国家の形成期に特徴的に出現する。エジプトのピラミッドや日本の古墳はその代表的なものであり、ミケーネ文明のトロス墓もまたこの範疇に含まれる。

ところが、ギリシアでは、もうひとつの初期国家の形成期、すなわちミケーネ文明が崩壊してからポリスが成立するまでの段階（初期鉄器時代、あるいは「暗黒時代」）には、このような現象がみられない。市民間の横並びの関係を基本とするポリス社会に大規模な墓が現れないことは当然としても、その前段階においてさえ、有力者による大規模な墓の構築を通じての威信の強調がみられないことは、注目すべき現象である。確かに、前八世紀の大型墓標クラテールにその片鱗がみられないわけではないが、この場合に誇示されているのは、被葬者の政治的な権威や権力というよりはむしろその財力であろう。

このような状況は、ポリス社会の形成過程がミケーネ文明の盛衰とまったく無関係なものではなく、諸宮殿の崩壊による社会構造の激変というエピソードをはさみながらも、ミケーネ文明の形成からポリスの成立までが一連の歴史的プロセスとして把握されうることを示唆している。それは、もちろんこのプロセスを東地中海という大きなコンテクストから切り離そうとするものではない。それどころか、ミケーネ時代の支配層は、おそらく同時代の西アジアとの交渉を通じて、王であるということが同時代において何を意味するかについて十分に認識していたはずである。竪穴墓で観察される副葬品の国際性や、象徴としての戦車の重視も、彼らの「王権」のよりどころが、そのような外部世界との交渉の独占にあったことを暗示している。にもかかわらず、彼らは西アジア的な王権の表現までをもそのままの形で受容することはなかった。それをもっとも明快に示しているのが、王権の表象の問題である。

王権を支える権威と権力とを不動のものとするためには、王権にかかわるさまざまな表象を体系化し、それを社会のなかに徹底する作業が行われるのが一般的である。ところが、同時代の西アジア世界と比較したときのミケーネ文明の顕著な特徴は、戦車やグリフィンのようなわずかな例外を除いて、そのような表象の体系化と積極的なアピールがほとんど行われた形跡がないことである。そもそも、王権の直接的な表象となる王像や王の業績を刻んだレリーフなどは、ミケーネ文明の世界にはまったく存在しない。ファラオの絢爛たる「列伝」によってその展開を物語ることのできるエジプトの場合とは対照的に、ミケーネ時代のギリシアでは、たった一体の王の事績すら知ることができないのである。

ミケーネ時代に環東地中海域とのさまざまなレヴェルの文化交渉が活発に行われたことは、ギリシアで出土する外来の遺物や、逆にエジプトをはじめとする環東地中海世界から大量に発見されるミケーネ土器の存在からも明らかである。しかも、すでにみたように、戦車など非実用的ではあっても王権の象徴として有用なシンボルは、むしろ積極的に導入されている。実際に、エジプトなどで威圧的な王の像や、葬祭殿を埋め尽くす王の事績録の浮き彫りを目にしていたギリシア人も少なくなかっただろう。にもかかわらず、彼らは、それをギリシアで再現することはなかった。それはなぜだろうか。

それは、王像の建立のような王権の露骨な提示が、ミケーネ世界の社会の規範に反することだったからにちがいない。ミケーネ時代における王は、たしかに西アジアの初期国家と共通する性格もそなえた階層化社会の最上位に君臨してはいたが、王とそれ以外の人々のあいだの距離は、エジプトなどにくらべれば、はるかに小さかったようなのである。同時代史料に、王の名がそれと判る形ではまったく伝えられていないことも、その顕著な反映であろう。王権の表象の受容が選択的にしか行われなかったことは、それ自体、この時代のエーゲ海に王権に対する独自の理解があったことを裏付けている。

ミケーネ文明の諸宮殿は、前一三世紀の末に一連の騒乱のなかで崩壊し、歴史から姿を消すことになる。この騒乱の原因は複合的なものであったと考えられているが、宮殿の消滅にもかかわらずミケーネ文明の文化要素がその後も一世紀以上にわたって観察されることは、王権の座所としての宮殿が存在しなくても社会がなおしばらくのあいだ存続することができたことを示している。それは、王権の性格が限定的であって、社会的統合の決定的な契機ではなかったからこそ可能だったのではないだろうか。

時代がくだって前八世紀に成立するホメロスの叙事詩にどれほどミケーネ時代の記憶が伝えられているのかは判断の難しい問題であるが、そこでも王権の蚕食が物語の展開の上で重要なモティーフとなっていることは偶然ではないであろう。ミケーネ文明の王権の性格を見定めるには、エーゲ海世界における王権の通時的な分析が必要とされているのである。

II　岐路としての初期鉄器時代

1.　ギリシア初期鉄器時代の歴史的意義

前二千年紀の末に東地中海世界のほぼ全域を巻き込むように展開した「前一二〇〇年の破局」と呼ばれる急激な文化変化の波は、高度に複雑化した各地の青銅器文明を次々に崩壊へと導いた。アナトリアでは、製鉄技術の独占によって富強を誇ったヒッタイト帝国が前一二世紀の初めに忽然とその姿を消してしまう。エジプトでは、「海の民」の侵入こそ第二〇王朝のファラオたちによって退けられたものの、これを機として王権の求心性は急速に失われ、第三中間期へと移行する。状況はエーゲ海でも同様であり、ミケーネ文明の諸宮殿は前一二〇〇年前後に相次いで破壊され、華やかな宮殿文化も失われていく。いわゆる暗黒時代の到来である。

しかし、前八世紀になると、その暗黒時代にも次第に明るい光が差し込んでくる。それを象徴するのが、ヨーロッパ最古の文学作品であると同時に、当時の人々にとっては倫理と叡智の宝庫であったホメロスの叙事詩の成立である。しかし、『イリアス』と『オデュッセイア』に描かれている世界は、暗黒時代時代の闇に慣れた目にはあまりにも眩く、その叙述内容の歴史的背景を見定めることは必ずしも容易ではない。そもそも、叙事詩に描き出されたホメロス的社会には特定の時代の姿がそっくり反映されているのか、それともホメロス的社会とは文学上の虚構であって、そこには先行するさまざまな時代の文化要素がコラージュ的に散りばめられているのか。さらに前者だとすれば、それは歴史上のどの時代に相当するのか、あるいは後者だとすればここの叙述内容を特定の時代の文化要素に還元することは果たして可能なのか。

これらのホメロス的問題の多くには、現在なお明確な解答が与えられていない。しかし、ただひとつ確かなことがある。それは、ホメロスの叙事詩の成立に代表される「前八世紀のルネサンス」と呼ばれる一連の文化現象こそ、ギリシア文明の発展の上で決定的な分岐点となったことである。前八世紀に、ギリシア世界はその構造においても空間的な広がりにおいても劇的な変貌を遂げた。その結果として誕生したのが、古代ギリシア文明だったのである。

しかし、ミケーネ文明の宮殿社会が瓦解した後のギリシアにポリスを基盤とする新たな文明が再構築されるまでには、それなりの長い時間が必要だった。暗黒時代とは、古代ギリシア文明の揺籃期に他ならなかったのである。このような視点に立つならば、どれほど考古学的な情報が乏しいために暗闇のように見えようとも、この時代を暗黒時代と呼ぶことは正当化されないであろう。そのため、近年ではこの時代を初期鉄器時代と呼ぶことが一般化しつつあり、本研究でもこの習慣に従うことにしたい。

ところで、「前一二〇〇年の破局」の原因については、これまでにも種々の説が提示されてきている。さすがに「ドーリス人の侵入」や「海の民の攻撃」のような民族移動を文化変化の要因とする旧来の説は下火となって久しいが、環境の荒廃や地震、気候変動などを重視する近年の諸説も、必ずしも支配的な地位

を占めるにはいたっていない。おそらく現在もっとも広く支持を集めているのは、宮殿中心の過度に複雑化した管理経済システムが何らかの引き金によって連鎖的な崩壊にいたったとする説（システム崩壊説）であるが、この場合にも説明モデルの細部には研究者によってかなりの相違がある。

しかし、「前一二〇〇年の破局」の性格をめぐる活発な議論を通じて、この文化変化については、以下のような特徴が浮かび上がってきている。まず、文化変化の速度に関してであるが、ミケーネ文明の宮殿の崩壊は突如として起こったものではなく、前一三世紀の後半（LHIIIB2）から進んだ緩やかな社会の変化の帰結だったらしい。たとえば、しばしばミケーネ世界の外部からの人間集団の到来の証拠とされる手づくねの「蛮族土器」についても、このような土器を用いる人々は宮殿の崩壊に先立って各地の王国に定住するようになっていたことが推測されている（周藤　1997）。変化の契機は、ミケーネ時代後期の社会のうちに胚胎されていたのである。

同様に、文化変化の質的な面に関しても、宮殿の崩壊後には依然としてミケーネ文明の文化要素が優勢であるばかりか、一時的にではあっても、むしろ前代よりも繁栄を見た地域もあったことが分かってきた（Muhly 1992）。たとえば、一九七〇年代に調査が行われたティリンスの下市では、宮殿の崩壊後に城壁外の都市域が拡大したことが指摘されている（Kilian 1988）。この調査を指揮したK・キリアンは、このような現象は周辺の村落の住民がティリンスの城塞の周辺に集住を行った結果であると推測し、宮殿崩壊後の時期にティリンスのあるアルゴリス地方の住民の多くがキプロス島などの海外に逃れたとする説に疑問を投げかけている。ティリンスばかりでなく、ミケーネ、アテネ、テーベ、イオルコスのようなミケーネ時代の拠点集落でも、宮殿崩壊後には依然として居住が続けられている。さらには、アッティカ東岸のペラティやアルカディアのパレオカストロのような大規模な岩室墓群は、宮殿崩壊後の時期になってから繁栄を迎えた集落も存在したことを示唆している。ミケーネ文明は、そのような地域的な揺り戻しを経ながら、緩やかに衰退していったのである。

2.　初期鉄器時代の物質文化

アッティカのケラメイコスやサラミスの墓域で特徴的に観察される亜ミケーネ文化が成立したのは、まさにそのような衰退への移行期、すなわち絶対年代では前一一〇〇年から一〇五〇年頃のことだったと考えられている。この亜ミケーネ文化が独立した編年単位であるか否かをめぐっては論争があり、これをミケーネ時代末期（LHIIIC）の地域的な変種に過ぎないとする説さえ唱えられたこともあったが（Rutter 1978）、今日では少なくともアッティカとその周辺では短いながらも固有の年代幅で存続したとする説が有力である（Mountjoy 1986）。しかし、ギリシア文化圏全体に目を向けるならば、ミケーネ時代末期と亜ミケーネ期とは編年的にある程度並行していたと考えるべきであろう。このような見解の不一致は、亜ミケーネ文化が圧倒的に墓の副葬品によって同定されており、これに対応すべき集落の様相がほとんど知られていない

ことに由来している。土器の形態的な特徴の面では、亜ミケーネ文化の土器は鐙壺をはじめとしてすべてその系統をミケーネ土器にたどることができるが、その文様は簡素化されレパートリーも限定されている。変化の痕跡が著しいのは土器よりもむしろ葬制そのものであり、ミケーネ時代末期まで支配的だった岩室墓への複葬に代わり、アッティカの亜ミケーネ文化では石槨墓や土坑墓への単葬が支配的になっている。副葬品の内容は概して貧弱だが、この時期から鉄製品が出現することは注目に値する。

おそらく前一〇〇〇年頃を境として、アッティカではコンパスによって描かれた同心円（もしくは半円）の施された土器を特徴とする原幾何学文様期に移行する。特徴的な器形としては、頸部もしくは腹部に把手のあるアンフォラ、クラテール（混酒器）、オイノコエ（「ワインを注ぐ容器」の意）と呼ばれる壺、脚部のある杯などがある。葬制面では、この時期に初めて火葬骨壺葬が導入される。これは、土坑の底部に穴を掘って火葬骨（灰）を収めたアンフォラを立て、その周囲に棺台で遺骸を荼毘に付した際の残滓を流し込み、最後に土坑を土で埋めるという独特の葬制である。

これに続く時代が幾何学文様期であり、広く受け入れられているN・コールドストリームによる年代観に従えば、初期幾何学文様期（EG）I、初期幾何学文様期 II、および中期幾何学文様期（MG）Iが前九世紀に、中期幾何学文様期 II、後期幾何学文様期（LG）Iが前八世紀前半に相当する（Coldstream 1968）。

アッティカの初期幾何学文様期の土器は、頸部に文様パネルと胴部に鋸歯文の帯を残しただけで、器面の全体が黒く塗りつぶされていることが多い。装飾要素としては、コンパスによる同心円文に代わって、メアンダー文やジグザグ文が主体となる。形態的には原幾何学文様期の土器とのあいだに大きな変化はないが、クラテールの脚部がより顕著になるのに対して、前代のスキュフォスにあった円錐形の脚部は小さくなる。中期幾何学文様期になると、三本一組の線が胴部にめぐらされるようになり、連続菱形文や連続渦巻文のような装飾要素が現れる。この時期に特徴的な器形には、蓋の上に一頭から四頭の馬を造形するピュクシスがある。

しかし、質量ともにアッティカの幾何学文様土器が隆盛を見るのは、後期幾何学文様期になってからである。この時期には、アッティカの各地に墓域が営まれるようになり、そこからは副葬品として数多くの土器が出土している。この時期の土器の技術的な完成度をよく示しているのが、「ディピュロンの画家」と呼び慣わされている土器画家（とその工房）の手になる巨大な墓標用の土器であり、そこには精緻を極める幾何学文様とともに、高度に様式化された葬儀や戦闘、戦車行列などの情景が描き込まれている。その代表作の一つが、アテネ考古学博物館に展示されているいわゆる「ディピュロンのアンフォラ」であり、高さ一・五五メートルにも達する巨大な土器の底部を除く全面には、幾何学的なモティーフが連続する文様帯が隙間なく囲繞し、二つの把手のあいだに配されたパネルには、棺台に横たわる女性の遺骸を囲んで哀悼の身振りを示す人物群像が描かれている。このような大型土器は、当時の社会のエリート層の注文によって制作され、墓の上に建立されたらしい。

アッティカの幾何学文様土器がたどった様式的な変遷は、初期鉄器時代の文化編年の準拠枠となるものであるが、そのことは必ずしもこの時代のギリシアが斉一的な物質文化のもとにあったことを意味するも

のではない。むしろ、初期鉄器時代のギリシアは文化的な地域差のきわめて顕著な時代だったと考えられており、それは土器の様式の多様性にも反映されている。

アッティカの北に浮かぶエウボイア島では、アッティカが初期幾何学文様期に移行した後も、依然としてコンパスを用いた懸垂同心半円文によって装飾された杯が製作された。このような杯は、キプロスやシリアなどの東方から集中的に出土しており、レフカンディ（後述）などを拠点としていたエウボイア島の人々が、前九世紀までにはこれらの地域に進出していたことを示している。ホメロス風の『アポロン讃歌』ではエウボイアは「船に名高い」と謳われているが、エウボイア系の幾何学文様土器の東地中海各地からの出土状況は、レフカンディから出土した大型の船を描いた後期幾何学文様期のピュクシス（Popham 1987）ともども、初期のエウボイア系ギリシア人たちの海外での活躍ぶりを印象づけるものとなっている。

アッティカの東に広がるエーゲ海の島々（キクラデス諸島）でも、個性的な幾何学文様土器が生産されていた。とりわけ、二つの把手のあいだを三つのパネルに区切って同心円文を配するナクソス島産のアンフォラや、器面に幾何学文をシンプルに配したテラ（サントリーニ）島産のアンフォラは、後期幾何学文様期までには島ごとに独自の土器生産の伝統が確立されていたことを示唆している。ミコノス島の南西に浮かぶレーネイア島からは、前六世紀と前五世紀に行われたデロス島の浄祓に際して移された早い時期の墓の遺物が出土しているが、そこからはデロス島が初期鉄器時代の末までにエーゲ海のもっとも重要な聖地となっていたことが窺われる。

アッティカの西に位置するコリントスでは、アッティカのものと類似した幾何学文様土器が生産されていたが、中期幾何学文様期 II から後期幾何学文様期になると、口縁部の下に横位の連続山形文を配したスキュフォスや、細い横線で装飾されたコテュレと呼ばれる特徴的な深鉢が生産された。これらは、シチリア島などの西方ギリシア植民市の最下層から出土し、コリントス人が前八世紀の後半にこの地域で活発な植民活動を行ったという伝承を裏付けている。このコリントス産の土器と共通した特徴を持つものに、シチリア島のタプソス遺跡にちなんでタプソス・グループと呼ばれる土器があるが、このグループの土器では、しばしば器面の上半部に船が描かれている。

エーゲ海の東岸にあたるイオニア地方やさらに南のロドス島でも、後期幾何学文様期には独自の様式が顕著になってくる。特に注目されるのが、幾何学文様を配したパネルに鳥をあしらった装飾の存在からバード・ボウルと呼ばれる脚部のついた浅い双把手の杯であり、この地域では形態的な発展を遂げながらも前七世紀まで使用されていた。バード・ボウルはデロス島からも数多く出土しており、この島がこの地域の人々にとっても重要な聖地となっていたことを示している。

この時代にとりわけ地域色が色濃かったのが、クレタ島である。クレタ島では初期鉄器時代になっても依然として岩室墓への複葬が行われ、土器にも鐙壺をはじめとするミノア文明時代の器形が継承された。クノッソスの近郊の墓域では、アッティカの中期幾何学文様期に並行する時期になると、「クレタ原幾何学文様Ｂ」と呼ばれる独特の様式が成立する。これは、キプロスやシリアに由来する装飾要素の存在を特徴としており、この時期の東地中海の文化交流を考える上で重要な資料となっている。

3. 初期鉄器時代の社会構造

初期鉄器時代の文化については、V・R・デズバラ（Desborough 1972）やコールドストリーム（Coldstream 1972）らによって、早くから幾何学文様土器の編年作業を中心とする地道な研究が重ねられてきた。その基礎となるデータを提供してきたのが、第二次世界大戦前からドイツ考古学研究所によって発掘が継続されているケラメイコス遺跡である。とりわけ、一九七五年にG・クラウゼによるケラメイコスの墓の詳細な研究が公刊されると、それをもとに、この時代の社会構造についてより大胆な解釈を提示する動きが活発になってくる。その先駆けとなったのが、A・スノドグラスによる研究だった（Snodgrass 1980）。

スノドグラスは、前九世紀までの停滞した社会状況に終止符が打たれるには、何らかの構造的な革命が必要だったと考えた。そこで彼は、墓に副葬された土器の年代を手がかりとして世代ごとの墓の数から人口の通時的動態を推測し、そこから、分析の対象となったアテネやアルゴスでは、前八世紀に急激な人口増加が起こったことを主張した。墓の数の変化から推測された爆発的な増加（アテネでは、前七八〇年頃から前七二〇年頃までの二世代間に七倍も増加したと考えられている）という現象については、これをむしろストレートに死者数の増加と解釈して人口の減少を推測する立場もあるが、同じ時期に集落の数が急増していることからも、スノドグラスの解釈の方がより説得的であろう。

さらに、スノドグラスは墓の数の増加という現象に反映されたこの時期の人口増加（より正確には都市部への人口集中）と集落の数の増加とが、社会全体に大きな変化をもたらしたことを示唆している。具体的には、人口が増加することにより、共同体のなかでの分業が進むとともに、共同体を統治するための組織が必要になってくる。また、集落の増加が共同体相互のコミュニケーションの機会を密にする結果、さまざまな変化のスピードが速くなることが予想される。そのような状況を背景として成立した新たな共同体のあり方こそが、古代ギリシア文明のもっとも重要な政治単位、すなわちポリスだったのではないかというのが、スノドグラスの説の骨子である。

スノドグラスが着目した通時的な墓の数の増減という現象については、I・モリスによってより詳細な葬制面からの検討が加えられている（Morris 1987）。モリスは、初期鉄器時代から前古典期のアテネの墓域における成人と幼児の墓の比率を埋葬場所との関連で詳細に検討した。その結果、モリスは、亜ミケーネ期と後期幾何学文様期、そして赤像様式期（前一一世紀、前八世紀後半、前五二五年頃以降）には、墓域に成人と幼児の墓がともに存在するのに対して、それ以外の原幾何学文様期から中期幾何学文様期と原アッティカ様式から黒像様式期（前一〇世紀から前八世紀前半、前七世紀から前六世紀）には、幼児の墓がほとんど存在しないことを指摘した。そこからモリスは、後者の時期のアテネでは、正式の埋葬（考古学的に確認することのできる埋葬）は社会の上層の成人にだけ許された特権だったのではないかと考えたのである。

このように葬制と社会構造とのあいだに相互の密接な関連（一般法則）を認める説は、これを提唱する代表的な考古学者の名にちなんで「ビンフォード／サックスの仮説」と呼ばれている。R・ビンフォードによれば、「他の条件が同じ場合、ある社会文化的集合体を特徴づける葬制に相違が見られるならば、それは複雑な位階の序列を直接的に反映すると同時に、所属する社会の全般的な組織構造を反映する」とされる（Binford 1971）。このような仮説を踏まえて、モリスは前六世紀末までのアテネ社会が二五％から五〇％ほどのエリート層（アガトイ）とそれ以外の人々（同じくカコイ）から構成されていたと想定する。その上で、考古学的に検出される原幾何学文様期から中期幾何学文様期、そして原アッティカ様式から黒像様式期の墓はアガトイのものであり、これらの時期にはカコイは正式な埋葬から除外されていたのだと主張する。モリスによれば、アテネにおける後期幾何学文様期の歴史的意義は、この時期にカコイがアガトイと同じ葬制上の権利を獲得することによってアテネ市民となった（すなわち、アテネという市民団＝ポリスが成立した）ことにある。

アテネで観察される葬制の変遷への関心は、埋葬の形態だけではなく墓に副葬される土器や金属器の種類と量、とりわけ文様の様式などの複数の属性間の相関関係を統計的に分析したJ・ウィットリの研究にも引き継がれている（Whitley 1991）。ウィットリによれば、アテネにおける幾何学文様土器の様式が被葬者の位階、性別、年齢などのアイデンティティともっとも密接な結びつきを示しているのは、前九世紀である。この時代には、高価な金属製品や東方から搬入された奢侈品が特定の墓に集中し、副葬された土器の様式とともに被葬者の位階を規定する役割を果たしていた。このことから、ウィットリは前九世紀こそが前古典期のアテネに貴族政社会が成立するための出発点だったのではないかと論じている。

モリスとウィットリの研究に対しては、ケラメイコスからのデータに過度に依存していること、分析方法の精密さとは裏腹に編年の枠組みが脆弱なこと、ミケーネ時代からの連続性が考慮されていないことなどの点について、鋭い批判も寄せられている（Papadopoulos 1993）。しかし、もっとも深刻な問題は、これらの研究成果をどこまでギリシア世界に広く敷衍して考えることができるのかという点である。

既に土器について述べたように、先行するミケーネ時代の物質文化がコイネと呼ばれるほどの高い斉一性を特徴としているのに対して、初期鉄器時代のそれはきわめて地域差が著しかったと考えられている。これは、葬制の場合についても同様であり、たとえばアテネを除けばもっとも調査が進んでいるクレタ島のクノッソス周辺の状況は、アテネのそれとはまったく異なる様相を示している。特筆すべきは、アテネの場合とはむしろ逆に、クノッソスでは前七〇〇年頃から墓ごとの副葬品の貧富の差が大きくなるという指摘である（Coldstream 1991）。

このような状況を考慮するならば、たとえ資料の豊富なアテネで初期鉄器時代の社会構造に関する一定のモデルが得られたとしても、それを同時代のエーゲ海に広く適用することには問題があると言わざるを得ない。しかし、その一方で、前八世紀にギリシア各地でポリスが成立した歴史的事実を重視するならば、これに先行する時代の各地の社会のなかにポリスを胚胎するための何らかの共通の要素を抽出していかなくてはならないことも確かである。ギリシア初期鉄器時代研究が直面しているディレンマは、まさにこの

点にある。

このようなディレンマがもっとも顕著に現れているのは、集落研究の場合である。もし、初期鉄器時代の歴史的意義がポリスを中心とする古代ギリシア文明を準備した点にあるのならば、まず研究の対象とされるべきは、後にポリスが成立した場所のはずである。ところが、アテネやクノッソス、アルゴスのように、後にポリスの中心市となる遺跡では、初期鉄器時代の考古学的証拠は圧倒的に墓に偏っており、社会構造を知るためのもっとも重要な手がかりである集落の様相についてはほとんど知ることができない。これらの遺跡では、先史時代から初期鉄器時代を経て歴史時代まで安定した集落が営まれていたはずであるが、まさにその継続的な居住が初期鉄器時代の集落景観の解明を妨げているのである。

ところが、初期鉄器時代には、比較的短期間の居住の後に放棄され、その後はポリスの中心市へと発展することのなかった不安定な集落が少なからず存在した。メッセニアのニホリア、クレタ島のカルフィやカヴーシ、エウボイア島のレフカンディ、パロス島のククナリエス、アンドロス島のザゴラ、キオス島のエンボリオなどが、その代表的な遺跡である。

このような不安定な集落の存在は、初期鉄器時代の社会を理解する鍵となる現象として、研究者の関心を集めてきた。ウィットリは社会人類学で用いられるビッグ・マンの概念を援用して、これらの集落の特徴を解釈しようとしている。ビッグ・マンとは、いわゆる首長（ルビ：チーフ）とは異なって、一代限りの個人的な権威によって人々を従える有力者のことである。このようなビッグ・マンによって組織される社会では、彼の支配力を担保する権威が世襲されないために、集落の存続期間が短くなるというのが、この解釈の眼目である。なお、ビッグ・マンを中心とする社会は「低位の首長制社会」とも呼ばれるが、そのような社会をもっとも鮮明に描き出した民族誌がホメロスの叙事詩（とりわけ『オデュッセイア』）であると主張する研究者もいることには留意が必要である（Donlan 1994）。いずれにしても、これらの集落が最終的にポリスの中心市とならなかったことは、これらの遺跡を初期鉄器時代の典型的なみなして良いのかという深刻な問題を提起している。

これに対して、初期鉄器時代の社会の全体像について、よりインパクトの大きい議論を展開しているのが、スノドグラスである（Snodgrass 1987）。スノドグラスは、このような集落の不安定さを初期鉄器時代の一般的な特徴である集落遺跡の少なさと関連づけ、この時代には生業のなかで移動性の高い牧畜に依存する割合が高かったのではないかという大胆な仮説を提示している。その根拠とされるのが、この時代の初期に移動性の高い牧畜に伴うと考えられているアプシダル・ハウス（プランが長方形でその端部が半円形を呈する家屋）が出現すること、やはりこの時代の初期にオリュンピアなどの聖域に牛や羊などの家畜を象った奉納物が盛んに奉納され、しかもその数が前八世紀に向かって減少すること、などの現象である。

ミケーネ時代はもとより新石器時代から農耕を基本とする社会が存続してきたギリシアでこのような仮説を提示することは、きわめて冒険的な試みである。ただし、生業はあくまで環境への適応手段であるから、定住農耕よりも牧畜に依存する割合を高くすることによって移動性の高い生活を送る方が望ましい条件下では、このような生業のシフトも起こりえたと考えられる。実際、オスマン帝国支配下のギリシアで

は、都市部に人口が集中する一方で、領域部では移動性の高い牧畜の比重が高かったことが知られている。

このように初期鉄器時代の社会構造をめぐっては、墓以外の考古学的証拠の乏しさもあって、依然として不明な点が少なくないのが実情である。しかし、近年目覚ましい勢いで展開されている初期鉄器時代の遺跡の調査からは、断片的ながらもこの時代の具体像が着実に浮かび上がりつつある。そこで、ここでは次に、そのような遺跡の調査状況に目を向けてみたい。

4. 遺跡の発掘調査にみる初期鉄器時代

カヴーシ

クレタ島の東部、アイオス・ニコラオスからシティアに抜ける山間の街道の入り口にあたるカヴーシ村の近郊では、A・エヴァンズがクノッソス宮殿の発掘を開始した一九〇〇年に、早くも女性考古学者として有名なH・ボイドによる遺跡の分布調査が行われている。その後、ここでは一九八七年から一九九二年にかけて、アメリカの調査団がカストロとヴロンダという二つの遺跡で集落と墓域の調査を行った。二〇〇二年からは、これらの遺跡から直線距離では一キロあまりしか離れていないアゾリアでも発掘が行われている（Haggis 2004）。カヴーシ周辺のこれらの遺跡は、いずれも青銅器時代の末期（後期ミノアIIIC期）から幾何学文様期を経て東方化様式期の初期まで（アゾリアでは前五世紀まで）利用されていたことが判明しており、その発掘成果は初期鉄器時代における地方集落の通時的発展のプロセスを考察する上で貴重なデータを提供している。

カストロの集落遺構は、カヴーシ村の南東に屹立する山稜から瘤のように突出した、海抜七一〇メートルの見晴らしの良い岩塊の頂にへばりつくように広がっている。後期ミノアIIIC期のクレタ島では、しばしば平野から離れた険しい岩山の陰に孤立的な集落が営まれるようになる。その特徴的な立地から、これらの集落は「避難集落」と呼ばれているが、カヴーシのカストロは、ラシティ高原の一隅にあるカルフィとともに、その代表的な例となっている。

カストロの考古学的な重要性は、この集落が前一二世紀の初めから前七世紀の中頃まで継続的に居住されていたことが、層位的な発掘によって検証された点にある。とりわけ、後期ミノアIIIC期と原幾何学文様期とのあいだに移行期が認められることは、土器の様式から推測されていたクレタ島における青銅器時代から初期鉄器時代への文化的連続性を再確認させることになった。最初期の家屋は地形に合わせて建築され、間取りにも規則性を欠いているが、原幾何学文様期になると、家屋のプランはより規則的なものになる。後期幾何学文様期には、テラスの構築によって集落は岩塊の南斜面に大きく広がっていたらしい。

カストロの西に位置するヴロンダは、カストロとは対照的に、海抜四二七メートルのなだらかな丘の上に立地している。ここでは、カストロよりもやや遅れて後期ミノアIIIC期の中頃に居住が始まり、炉やベンチなどを備えた二室から五室からなる複数の家屋を中心に生活が営まれていた。建物のうちの一つ（建

築物G）は祠だったらしく、この時期のクレタ島に特有の両手を挙げた女神像などの祭祀用品が出土している。ところが、ヴロンダの集落は後期ミノアIIIC期の末には放棄され、前八世紀から前七世紀になると、この場所には火葬骨を収めた墓が築かれるようになった。被葬者は、おそらくカストロの居住者だったと推測されている。

アゾリアは、カストロの北の麓に隆起する海抜三七〇メートルの丘の上に広がる集落遺跡である。ここでも居住は後期ミノアIIIC期に始まるが、初期鉄器時代の末におそらくカストロの居住者が移住してきた結果、アゾリアは前古典期になると都市化を遂げたと考えられている。

アゾリアの調査で特に注目されるのは、前七世紀のアンドレイオンの発見である。アンドレイオンとは、O・マレーによって「シュンポシオン」と総称されている社会集団のうち（Murray 1990）、クレタ島で特徴的に見られるものである。初期のクレタにおける重要な社会の編成原理として注目されるこのアンドレイオンについては、同時代の碑文史料に言及が散見されるだけではなく、アテナイオスの『食卓の賢人たち』に引用されたドシアダスの『クレタ誌』の一節（Ath.4.143）に詳しい説明があるものの、その実態はほとんど考古学的に確認されてこなかった。これに対して、アゾリアを発掘したD・ハッギスらは、クラテールの台や杯などの宴会用の什器がアクロポリス西斜面の特定のスペースから多数出土したことを根拠に、これこそがエリート層の共食の場であるアンドレイオンに他ならないと主張している。

クレタ島では、前七世紀の末から前六世紀にかけての時期に、しばしば「クレタの暗黒時代」と呼ばれる大きな文化的断絶の存在が想定されてきた。これが、研究史におけるクノッソス中心主義の産んだ虚構であるのか、それとも実際にこの時期のクレタ島で人口減少を伴う深刻な社会的混乱が生じたのかという点は、専門家のあいだでも論争の的になっている。しかし、カヴーシばかりではなく、プレッソス、エレフセルナなどクレタ島各地の遺跡における近年の調査の成果は、ギリシア本土の遺跡を中心に進められてきた初期鉄器時代研究の流れを変えるものとして注目される。

ニホリア

クレタ島でカヴーシのカストロに代表される避難集落が営まれるようになった前一二世紀に、ペロポネソス半島南西部のメッセニアは、文字通りの暗黒時代を迎えていた。メッセニアは、これに先行する前一七世紀から前一三世紀にかけて、ギリシア世界のなかでも特に集落が稠密に分布する地域だった。その繁栄を支えていたのが、ピュロスの宮殿によって制御された中央集権的な物資の再分配システムであり、C・ブレーゲンらによって一九三九年から発掘された宮殿跡（アーノ・エングリアノス遺跡）から出土した線文字B粘土板文書は、このシステムの稼働状況について知るための第一級の史料となっている。しかし、前一三世紀の末にピュロス宮殿が焼き討ちにあうと、再分配システムの瓦解によって、メッセニア各地の集落は壊滅的な打撃を受けたらしい。ミケーネ時代には約二四〇地点を数えた集落の数は、初期鉄器時代にはわずか二〇ほどにまで減少してしまう。前八世紀の後半になると、メッセニアはタイゲトス山脈によって隔てられた東のスパルタによって軍事的に制圧され、前三六〇年代まで地域の住民全体が隷属的な身

分に置かれることになったが、このような異例の歴史的展開は、ピュロス王国崩壊の影響がどれほど深刻なものだったかを物語っている。そのメッセニアにおいて、初期鉄器時代に居住されていた数少ない遺跡の一つが、ニホリアである。

メッセニアは、海岸に沿って丘陵が起伏する西部と、パミソス川の流域に平野が広がる東部から構成され、ミケーネ時代にはこの二つの地理単位が行政上「こちら側」と「向こう側」として区別されていた。その「向こう側」における拠点集落の一つだったと推測されているのが、メッセニア湾を望む海抜一〇〇メートルほどの平坦な台地上に立地するニホリアである（線文字B粘土板文書に現れるティミトアケエという集落をこれに比定する説もある）。ここでは、メッセニア地域調査の一環として行われた一九六九年から七五年にかけての発掘により、ギリシア本土では例外的に豊富な初期鉄器時代の考古学的証拠が得られている（McDonald et al. 1993）。

ピュロス宮殿の崩壊に続く前一二世紀の様相については不明な点が残るものの、初期鉄器時代のニホリアの歴史については、暗黒時代 I 期（前一〇七五ー九七五年）、暗黒時代 II 期（前九七五ー八七五年）、移行期（前八七五ー八〇〇年）、暗黒時代 III 期の四段階の時代区分が設定されている。

暗黒時代 I 期には、台地の上に点在する簡素な家屋に六〇人ほどの住民が暮らしていたらしい。しかし、暗黒時代 II 期になると人口は二〇〇人ほどにまで増加し、彼らは一軒の大型家屋（ユニット IV）を囲むように自分たちの家屋を配置するようになった。この家屋は、当初は長さが一〇・五メートルだったが、前九世紀には西端部に貯蔵用のスペースとして半円形のアプス部が付け加えられ、全長が一五・九メートルにまで拡張された。主室の西端からは円形の敷石遺構が検出されているが、これはその付近から羊や山羊の焼けた骨が出土したため、犠牲獣を焼いた祭壇だったと推測されている。暗黒時代 III 期には、住民数こそ前代よりも減少したものの、集落の中心に位置する大型家屋はさらに拡張され、全長が二〇・二メートルにまで達している。このような大型家屋は、上述したビッグ・マンの居館だったと解釈するのが妥当であろう。

ニホリアで特に注目されるのは、緻密な調査を通じて、住民の生業に関する詳しい情報が得られていることである。農作物については、コムギ、ブドウ、オリーヴという地中海の三大作物に加えて、豆類、イチジクなどが確認されている。しかし、より興味深いのは動物遺存体、とりわけウシの骨に関するデータであり、そこからは、食料に占めるウシの比率が、ミケーネ時代の最盛期には二〇%だったのが、その末期には一一%にまで下落するものの、初期鉄器時代になると四五%にまで増加することが明らかにされている。実は、初期鉄器時代の社会が定住農耕よりもむしろ移動性の高い牧畜に比重をおいていたというスノドグラスの仮説も、このデータをその根拠の一つとしているのである。それは同時に、ウシが財産として重視されているホメロス的社会をも想起させる。

このように、ニホリアは、ビッグ・マンによって統治され、牧畜の生業の基盤をおく初期鉄器時代の典型的な小集落とみなされるようになった。しかし、ニホリアの発掘から間もなく、アッティカの北に浮かぶエウボイア島で、この時代の社会像を一変させる事件が起こる。それがレフカンディ遺跡における「英

雄廟」の発見である。

レフカンディ

現代のエウボイア島の中心都市ハルキザ（古代のカルキス）からレラントス平野を南東へ七キロほど下ると、南エウボイア湾に面したレフカンディの静かな波打ち際に、クセロポリスと呼ばれる頂上の平坦な丘が隆起している。

クセロポリスは、南ギリシアには珍しく初期青銅器時代の末にさかのぼる文化層がテル状に厚く堆積する集落遺跡である。しかし、その周辺では亜ミケーネ期から亜原幾何学文様期（前一一〇〇ー前八二五年）の墓がみつかっているにもかかわらず、クセロポリスの調査からは、この時期の居住遺構が検出されなかった。そのため、一九六八年から七〇年にかけて、この時期の集落遺跡を確認するべく、クセロポリスの西端から北西に五〇〇メートルほどを隔てたトゥンバで発掘が行われたが、期待に反して、そこでも墓しか検出されなかった。

その後、風光明媚なレフカンディでは別荘地の乱開発が進み、それは一九八〇年にはトゥンバの頂上部にも及んだ。その過程で偶然に発見されたのが、一九八一年から八三年までギリシア考古局とイギリス考古学研究所によって発掘され、「レフカンディの英雄廟」として知られることになる原幾何学文様期（前一〇世紀）のアプシダル・ハウスである（M.R.Popham et al. eds. 1993)。「英雄廟」という通称は、報告者であるM・R・ポッパムが、建物は主室中央部にある墓坑への埋葬の後に建築されたと解釈していることによるが、これには層位的な裏付けはなく、逆に建物が先にあってその中に墓が設けられたとする説もある。しかし、いずれにしても、レフカンディの「英雄廟」は、以下の二つの点で従来の初期鉄器時代像に、根本的な再考を迫ることになった。

第一に、その規模である。木造とはいえ主体部だけで全長約四五メートル、幅約一〇メートルを計る巨大な「英雄廟」の存在は、初期鉄器時代には大規模な建築物が存在しなかったという一般的通念を打ち砕くには十分だった。平面プランが異なるため単純な比較はできないが、時代が下って前七世紀になっても、これと比肩する規模の建築物は、アルゴスの古ヘラ神殿やエレトリアのアポロン神殿くらいしか見あたらない。しかも、遺物から想定されるその年代は、初期鉄器時代のなかでももっとも文化的に低迷していたと考えられてきた前一〇世紀の原幾何学文様期である。しかし、一九九二年には、アイトリアの聖域テルモンで、やはり初期鉄器時代に年代づけられる二棟の大規模な建築物（メガロンAとB）の存在が確認され、レフカンディの「英雄廟」だけが特別だったわけではないとする説も有力になりつつある(Morris 2000)。

第二に、「英雄廟」からの出土遺物は、初期鉄器時代のギリシアが孤立的だったとする通説にも、反証を突きつけることになった。というのも、「英雄廟」の主室に掘り込まれた墓坑の一つには、火葬された男性戦士と土葬された女性が葬られていたが、このうち男性の火葬骨を収めた青銅製のアンフォラは、前一三世紀後半から前一二世紀にキプロスで製作された伝世品であることが判明したからである。それだけではない。女性の喉におかれていた黄金製の宝飾品もまた、古バビロニア時代に製作された伝世品だったこと

が示唆されている（Popham 1994）。さらには、これらの墓坑の上に墓標として置かれていた器高約八〇センチの大型クラテールは、「生命の樹」のように明らかに東方的なモティーフによって装飾されていた。それらは、「英雄廟」の被葬者にとって、外部の世界、すなわち「過去」と「東方」が特別な意味を持っていたことを暗示している。

それでは、同時代の一般の貧しい墓とは隔絶した性格を持つこの「英雄廟」の被葬者とは、いったい何者だったのだろうか。モリスは、青銅製アンフォラに火葬されたこの男性こそ、ギリシア人の精神世界でオリュンポスの神々と並んで重要な役割を果たすテクニカルな意味での英雄、すなわち半神だったと考える（Morris 2000）。前八世紀の詩人ヘシオドスによる『仕事と日』には、同時代である「鉄の時代」の前に高貴な半神たちが活躍する「半神の時代」があったとする有名な「五時代の説話」が物語られている。そこでは、半神はトロイ戦争などの伝承に登場する英雄と同一視されているが、このような半神の時代を含む「五時代の説話」を、モリスはミケーネ文明崩壊後の前一一世紀の産物と考える。この時代のギリシア人のエリート層は、前一一世紀の末までにミケーネ文明（「半神の時代」）の崩壊によって引き起こされた表象体系の破局を克服し、「東方」との関係をいったん断ち切るとともに、新たな「鉄の時代」の秩序を確立した。しかし、半神の属する「過去」が「現在」から峻別されたことにより、逆に、卓越した個人だけは半神として「過去」と特権的な結びつきを享受できるという思想が生まれてくる。前一〇世紀のレフカンディの住民は、「過去」と「東方」とにかかわるシンボルとともに自らの共同体のリーダーを埋葬することで、彼を「半神」の地位へと押し上げたのである。

レフカンディの「英雄廟」に対するこのようなモリスの仮説は、考古学的な証拠を踏まえながらも大胆な解釈を提示している点で、きわめて魅力的に映る。しかし、モリス自身が認めているように、別の新たな発見によってこの仮説を棄却せざるをえなくなるという事態もありうることには、十分な留意が必要である。たしかに、レフカンディの「英雄廟」は初期鉄器時代のギリシアの社会について多くの示唆を与えてくれるが、それを同時代の他の考古学的証拠と照らし合わせることで相対化していく作業が、今後の課題となるであろう。

オロポス

そのような比較の対象となりうる遺跡として近年注目を集めているのが、アッティカとボイオティアとの境界に位置するオロポスである。レフカンディが前九世紀の末に放棄されると、エウボイア島ではレフカンディを挟んでほぼ東西に位置するカルキスとエレトリアが台頭し、次章で述べるように、これらの都市はギリシア人が西方に進出する過程で重要な役割を果たすことになる。現在、そのエレトリアの対岸にある港町がスカラ・オロプウであり、ここには古典期からヘレニズム時代にかけて、アテネとテーベによってその領有権が係争されたオロポスという都市が存在した。ここでは、一九八〇年代の半ばに、アソポス川が運んだ厚い沖積土の下から初期鉄器時代から前古典期にかけての集落遺構が発見され、一九九六年からはアテネ考古学協会による組織的な調査が行われている（Mazarakis-Ainian 1998, 2002）。

発掘地点は古典期のオロポスの西の市外にあたり、東西二つの区域から構成されている。東の「主要区」では、前八世紀後半から前七世紀にかけて、六段階の時期にわたって構築された楕円形や円形の建築遺構が検出された。とりわけ注目されるのは、埋土中の木炭や鉱滓の存在や床面の状態から、これらの建築物が鉄や青銅の冶金術に関わる工房、あるいはその作業に従事する人々の住居だったと推測されている点である。ペリボロスで囲まれた大型の住居Θも、製鉄作業などを監督していた裕福な一族が居住する家屋であり、そこでは冶金術と関わりの深い祭儀も行われていたらしい。この区域では約三〇基の同時代の墓もみつかっているが、興味深いことに、これらはすべて幼児の瓶棺葬である。

これに対して、「西区」では、一九八五年の緊急発掘で全長三五メートルに達する前八世紀後半の大型のアプシダル・ハウスが見つかっていた。しかし、二〇〇〇年に再開された発掘では、「主要区」の場合と同様に、ペリボロスを伴う楕円形や円形の建築物の遺構が複雑に密集した状態で検出されている。これらの建築物の多くは、前八世紀の後半に相次いで築かれては放棄されたらしい。しかし、出土遺物のなかにエウボイア島の亜原幾何学文様期の土器が混じっていることから、オロポスの集落の歴史がその頃にまで遡ることは確実である。また、この区域には、長さ五七メートル、幅一七・六メートルの長方形の遺構が存在するが、報告者のA・マザラキス・エニアンは、これが前七世紀の軍営の跡ではないかと推測している。

このように、オロポスの調査からは、エウボイアと文化的に密接な交流のあったこの集落で、前八世紀後半から前七世紀にかけて鉄や青銅の手工業生産が盛んに行われていたことが明らかになった。それでは、これらの鉱石は、いったいどこから調達されていたのだろうか。次章で述べるように、イタリア半島中部のイスキア島にあるピテクーサイからの知見は、ちょうど前八世紀の中頃から、エウボイア系のギリシア人がこの地に進出し、交易とともに冶金術を行っていたことを示している。オロポスの住民も、この頃から急速に進んだ海外との交流の活発に刺激されて、交易用の金属器の製作を生業とするようになったのであろう。

このような西方との関係で注目されるのは、このオロポスの初期鉄器時代の遺跡が古典史料にグライアという名称で現れる集落に比定されていることである。トゥキュディデスによれば、前四三一年にアッティカに侵入したペロポネソス同盟軍は、アカルナイからボイオティアを経由して撤退したが、その際、オロポスを通過するときに、「グライア領」と呼ばれる土地を寇掠した（Thuc.2.23.3）。当時アテネに隷属していたオロポス人が住んでいたこのグライアについて、ビザンティンのステファヌスは、アリストテレスを典拠としながら、グライアとはエレトリアの対岸に位置する廃村であると注釈を加えている。従って、前古典期の末に放棄された初期鉄器時代のオロポスの遺跡がグライアであった可能性はきわめて高い。一方で、ギリシア人（古典ギリシア語ではヘレネス、現代ギリシア語ではエリネス）は、やがて西方世界ではラテン語のグラエキから派生した名称で呼ばれるようになる。このラテン語がギリシア語のグライコイ（グライア人）に由来していることは疑いがない。そこからは、西方のギリシア人がグラエキと呼ばれるようになったのは、イタリア半島の住民が最初に出会ったギリシア人こそグライア人、すなわちエウボイア湾に面したこの小村落から海外に雄飛した人々だったのではないかという推測が導かれる。

この同定の是非はさておき、レフカンディやオロポスの居住遺構と、南イタリアにおける最初のギリシア人居留地であるピテクーサイのそれとの類似性の高さは、エウボイア湾をとりまく初期鉄器時代末から前古典期にかけての集落の構造変動が、ギリシア人の地中海への進出と大きく関わっていたことを示唆しているのである。

III　大植民時代とポリス社会の形成

1. ギリシア人の地中海への進出

一八世紀から一九世紀にかけて、南イタリアを支配する王国の都として繁栄をきわめたナポリ。目が覚めるように碧くきらめくナポリ湾と黒々としたヴェスヴィオ山の偉容、そして豪華な教会と重厚な建物の密集する街並みを舞台に繰り広げられる活気にあふれた人々の生活は、この地を訪れた北ヨーロッパの芸術家たちを魅了せずにはおかなかった。ナポリへの熱烈な賛辞にあふれたゲーテの『イタリア紀行』やリヒァルト・シュトラウスの瑞々しい交響詩『イタリアから』(「ナポリの民衆の暮らし」と題されたその第四楽章には、有名な「フニクリ・フニクラ」の旋律が使われている）などの作品からは、彼らの感激が生き生きと伝わってくる。現在でも、ナポリ旧市街を縦貫するスパッカナポリやベヴェレッロ港の界隈は、世界中から訪れる観光客で賑わっている。

しかし、そのナポリの名がギリシア語で「新しい都市」を意味するネア・ポリスという語に由来していること、そもそもこの都市は前七世紀にギリシア人による植民市として誕生したのであり、現在の旧市街の地下深くには古代ギリシア都市の遺構が埋もれていることは、あまり知られていないのではないだろうか。たしかに、現在のナポリでは、地上を歩いていて古代遺跡を目にする機会はほとんどない。しかし、古代のディオスクーロイ神殿を改装したサン・パウロ・マッジョーレ教会の傍らから地下に足を踏み入れるならば、そこには凝灰岩を掘り抜いた巨大な貯水槽や、ローマ時代に皇帝ネロが歌声を響かせた劇場の遺構などを目にすることができる。

ストラボンによれば、この地には近郊のクマエからのギリシア人が居住する都市があったが、後にピテクーサイやアテネの人々とともにカルキス人が新たな都市を築いて定住したために、ネア・ポリスと呼ばれるようになった（Strab.5.4.7)。その後、都市の住民は次第にカンパニアの原住民と同化したが、ローマ都市となっていたストラボンの時代（前一世紀後半）にいたっても、ここではフラトリアのようなギリシア的制度が堅持され、オリュンピア競技会などと肩を並べる規模の競技会が開催されていたという。

ナポリだけではなく、イスタンブールやマルセイユのような地中海の重要な都市は、いずれも前八世紀から前六世紀にかけてギリシア人たちが築いた植民市にその起源をもっている。それでは、なぜこの時期にギリシア人の空間が急激に拡大したのだろうか。また、この大植民活動という現象は、ギリシア文明の発展にどのような影響を与えたのだろうか。

Ｉ章で見たように、ミケーネ文明のギリシア人たちは、既に海を越えてキプロス、エジプト、シリア、イタリアなどと交易関係（もしくは互酬的な奢侈品の贈与関係）をもっていた。とりわけ、南イタリアのプーリア州の場合には、中期青銅器時代のミニュアス土器に始まってミケーネ時代末期までの各種の土器が出土していることから、前二千年紀を通してこの地にギリシア人たちが定住拠点を営んでいたことは確

実である。しかし、前一三世紀末の宮殿文明の崩壊とともに海外との接触は途絶え、それがようやく再開されたのは、前一〇世紀の末から前九世紀になってからのことだったらしい。

この時期のギリシアの状況にかんしてもっとも豊かな情報を与えるのが、前章でとりあげたエウボイア島のレフカンディ遺跡である。レフカンディの前一〇世紀の「英雄廟」で東方に由来する文化要素が見られることは前章で見た通りであるが、ここでは前九世紀に入ると東方との関係をより具体的に示す考古学的証拠が現れるようになる。その一例が、一九九四年にトゥンバ地区で発掘された七九号墓である（Popham & Lemos 1995）。

トゥンバ七九号墓は、アッティカ初期幾何学文様期 II 期のオイノコエを含む副葬品の様式から、エウボイアの亜幾何学文様期（前九〇〇ー前八五〇年頃）に年代づけられる男性の火葬墓である。火葬骨は青銅で作られた球形の容器に収められ、その傍らには先端部の曲げられた鉄製の刀と鉄鏃が置かれていた。その点で、この墓はアテネ（いわゆる「アレオパゴスの墓」Blegen 1952）、アルゴス（「甲冑の墓」Courbin 1957）、エレトリア（「西門」 Bérard 1970）などで知られる、いわゆる「戦士の墓」の範疇に属している。しかし、このレフカンディの墓が注目されるのは、墓坑から出土した副葬品のなかに、東方に由来することの明らかな遺物が存在することである。

まず、ヘマタイト製の小型円筒印章であるが、これは前一八〇〇年頃に北シリアで製作された伝世品と考えられている。土器には、赤地に黒色の文様を伴う土器や白色土器のようなキプロス産のものに加えて、ギリシアから出土したものとしてはもっとも古い段階のフェニキア製の土器が含まれる。これらの遺物は、火葬骨を収めた容器の傍らに置かれていた秤と推測される青銅製品および石製の分銅とともに、被葬者が生前に東方との交易に従事していたことを暗示している。

トゥンバ七九号墓の例は、初期鉄器時代の後半にギリシア各地で増加する東方系の遺物（オリエンタリア）が、この頃に東方からギリシアへ進出してきたフェニキア人の商人によってばかりではなく、自ら海外に進出したギリシア人によってもたらされたものであることを示唆する点で重要である。たしかに、ブルケルトによる「東方化革命論」を筆頭としてこの時期におけるフェニキア人の活動とその影響を再評価すべきことを主張する説には傾聴すべきところが多いが、それによって逆にギリシア人の側の活動が過小評価されるのは問題であろう。この時期の東西文化交渉の過程を考える際に基本となるのは、あくまで東地中海の諸遺跡からの考古学的な知見でなくてはならない。このような立場をとる際、まず検討の対象としなくてはならないのが、最初期のギリシア人の交易拠点として知られるアル・ミナである。

北シリアのオロンテス河口に位置するアル・ミナ遺跡は、青銅器時代におけるエーゲ海文明と西アジア文明との中継地を探し求めていたレナード・ウーリィ卿によって、一九三六年から翌年にかけて発掘された。その結果、この遺跡は青銅器時代ではなく鉄器時代に居住されていたことが明らかになったとはいえ、アル・ミナは前一千年紀（とりわけその最初期）の東西文化交渉のあり方を考える上でもっとも重要な遺跡としての位置を研究史に獲得することとなった。というのも、この遺跡からは約一五〇〇点にも及ぶギリシア産の幾何学文様土器が出土したからである。もちろん、幾何学文様土器はシリアやフェニキアの各

地の遺跡からも出土しているが、近年アル・ミナを中心にレヴァントからの資料を再検討したJ・ルークによれば、それらは総計でも二〇〇点に満たない。アル・ミナがいかにユニークな遺跡であるかは、この点一つをとってみても明らかであろう。

アル・ミナでは十の文化層が識別されているが、このうち最下層の第一〇層から第七層までが、ギリシアの幾何学文様期に相当する。暦年代との対応については研究者のあいだで議論があるが、J・ボードマンの編年観に従うならば、第一〇層から第八層までは前七七〇年頃から前七二〇年頃に、第七層は前七二〇年から前六九六年（アッシリア王センナケリブによるキリキア反乱の鎮圧の年）にあたる（Boardman 1999a, b）。

これらの層から出土したギリシア産の土器には、いくつかの明確なグループが識別される（Boardman 1999a）。様式的にもっとも年代が古いのは、コンパスによって懸垂半同心円文を描いたスキュフォスであるが、これはレフカンディの発掘によってエウボイア起源であることが実証されている。他にも、直線的な器壁に白色もしくはクリーム色のスリップで充填された幾何学文様を描く杯、直立する口縁部に小さな同心円文を並べて胴部に幾何学文様をパネル状に配する杯、さらには原コリントス様式を模倣したコテュレなどは、すべてエウボイアで生産された可能性が高い。このように、キプロスに由来する一部の土器を除くならば、アル・ミナから出土したギリシア産幾何学文様土器は、圧倒的にエウボイアに由来していると考えられるのである。それでは、これらの土器は、どのようなプロセスによって東方にもたらされたのだろうか。

たしかに、まず想定されるべきは、海上交易で名を馳せたフェニキア人を筆頭とする東方の人々が交易のためにギリシアへ赴き、そこからこれらの土器をレヴァント地域にもたらしたというケースであろう。しかし、ルークが指摘するように、フェニキアやキプロスからの搬入品がギリシアでもっとも早く出現するのがエウボイアのレフカンディである一方で、早い段階からシリアやフェニキアと交流があったはずのクレタ島の土器がレヴァント地域では見られないことは、フェニキア人のような東方の人々ばかりではなく、むしろエウボイアのギリシア人が積極的にこれらの土器のレヴァント地域への搬入に関与していたことを強く示唆している。

とりわけ、エウボイア系の土器が東方では前七〇〇年頃を境に姿を消してしまうことは注目に値する。というのも、これは後述する西方へのエウボイア人による植民活動の終焉とともに、カルキスとエレトリアとのあいだで戦われたレラントス戦争の影響ではないかと考えられるためである。レラントス戦争は、トロイ戦争のような伝承上の戦争を別とすれば、後代までギリシア世界で語り継がれることになった最古の大規模な戦争であり、それは同時にエウボイア人が海外交易や植民活動から手を引くきっかけとなったと推測されている（Boardman 1982）。もし、この推測が正しければ、アル・ミナへエウボイア系の幾何学文様土器を供給したのも、エウボイア人自身であった蓋然性がますます高くなる。

しかし、アル・ミナから出土したギリシア系の土器が精製土器に限られ、地元で生産された模倣品を含んでいないことは、それらがあくまで交易によって搬入されたことを示している。すなわち、前八世紀段

階のアル・ミナはギリシア人による重要な東方交易の中継地ではあっても、まだギリシア人の安定した居住地とはなっていなかったのである。それでは、地中海における最古のギリシア人の定住拠点はどこにあったのであろうか。その有力候補と目されている遺跡が、南イタリアのピテクーサイである。

ナポリ湾の沖合には、「青の洞窟」で有名なカプリをはじめとする大小の美しい島々が浮かんでいる。輝く海を彩る島影の重畳がエーゲ海の景観を彷彿とさせるためだろうか、前八世紀にエウボイア系のギリシア人が最初の交易拠点をおいたのは、それらの島の一つであるイスキア島だった。ピテクーサイの名で知られるこの遺跡は、イスキア島の北西端に位置するラッコ・アメーノの小高い丘（モンテ・ディ・ヴィコ）をアクロポリスとして、その麓に広がっている。ここでは、おもにリッジウェイの研究に依拠しながら（Ridgway 1992）、この遺跡からの知見を検討していきたい。

出土した土器片から判断するならば、ピテクーサイに最初のギリシア人が到来したのは、口縁部の下に連続くの字文が施されたスキュフォスがギリシア本土で生産されていた時期のことだったらしい。このようなスキュフォスは、アル・ミナなどで見られる懸垂半同心円文を描いたスキュフォスよりも一段階新しく、中期幾何学文様期に編年されている。したがって、標準的な編年観に従うならば、ピテクーサイでは、遅くとも前七五〇年頃までにはギリシア人の交易拠点が確立されていたことになる。しかも、アル・ミナの場合とは対照的に、出土した幾何学文様土器片に占める在地の模倣品の割合が約八割に達している状況は、渡来してきたギリシア人たちが実際にこの地に定住していたことを物語っている。それでは、彼らはいったい何を目的としてこの地に進出し、何を生業として暮らしていたのだろうか。

この点を考える上で重要な手がかりを提供するのが、メッツァヴィア地区で発掘された前八世紀の工房跡である。ここでは、高熱を受けた痕跡のある床面から大量の鉄のスラッグが出土し、そこで鉄鉱石の精錬作業が行われていたことが明らかになった。最初期のギリシア人が製鉄のために使用した溶鉱炉などの遺構は、近年ラッコ・アメーノの広場に面した教会の地下でも発掘されており、現地で間近に目にすることができる。これらの証拠からは、ピテクーサイのギリシア人たちが、エルバ島で産出する鉄鉱石をはじめとする鉱物資源を求めてこの地に到来し、冶金術を主な生業としていたことが推測される。

また、この工房跡から出土した鉛のおもりが、八・七九グラムというエウボイア系の度量衡の基本単位に近い数字を示していることは、ピテクーサイがエウボイア島の有力都市であるエレトリアとカルキス出身の人々によって居住されていたというストラボンの記述（Strab. 5.4.9）を裏付けるものとなっている。工房の遺構の形態が、前章で見たオロポスの遺構のそれと酷似していることも、見逃すことができない。

ピテクーサイの住民は、おそらくイスキア島の火山活動が活発化したために、前七〇〇年頃に対岸の本土にあるキュメ（クマエ）へと移住した。農業生産に適した肥沃な平野を後背地とするキュメは、その後も安定したポリスとして発展していくことになるが、そのことは逆に、そのような後背地を持たない岩がちなピテクーサイを定住拠点とした最初期のエウボイア系ギリシア人たちが、経済的には鉄製品などの外部との交易に大きく依存する生活を送っていたことを示唆している。

ピテクーサイでは、一九五〇年代からアクロポリスの南西にのびるサン・モンターノの谷にある墓域の

調査も行われている。これまでに発掘されているのは、面積にして墓域全体のわずか一〇%ほどに過ぎないが、そこからは四九三基の前八世紀後半の墓が見つかっている。これらの墓はおそらく家族を単位とする明確なグループを形成しているが、成人の多くが火葬されているのに対して、子どもは一般に土坑墓に土葬され、幼児は瓶棺に葬られるなど、年齢による葬制の選択規制が存在したこと見てとることができる。しかし、定住の当初から成人と子どもが同一の墓域に葬られている状況は、前章で見た同時代のアテネやオロポスの場合とは対照的である。

サン・モンターノの墓域から出土した遺物でおそらくもっとも有名なのは、「ネストールの杯」と呼ばれるロドス産のコテュレであろう。この杯は、前七二〇年頃に一〇歳くらいで亡くなり例外的に火葬に付されることになった少年の墓（一六八号墓）に、シュンポシオン用の什器のセットの一つとして副葬されていた。「ネストールの杯」という通称は、胴部に三行にわたって右から左にエウボイア系のアルファベットが刻まれ、その冒頭部分にネストールという人名が属格で現れることによる。

コロンで分節されたこの韻文は、「ネストールは素晴らしい杯を持っていたが、この杯から飲む者も、たちまち美しい冠をいただくアフロディテ女神への欲望にとらわれるだろう」との意に解されるが、問題はネストールという人名である。というのも、このネストールの杯への言及は、ほぼ確実にホメロスの叙事詩『イリアス』第一一歌に現れる英雄ネストールとその黄金の杯のエピソードを踏まえたものと解釈されるからである。そして、もしこの解釈が正鵠を射ているのならば、この遺物は前八世紀に誕生したホメロスの叙事詩が、早くも同時代のピテクーサイのギリシア人のあいだにも普及していたことの証拠となる。この注目すべき碑文が、メグズとルイスによる『ギリシア歴史碑文集成』に第一番として採録されているのも、もっともなことといえよう。

これと並んで興味深い遺物が、ほぼ同じ頃にピテクーサイで製作された「難破船の混酒器」である。その器壁には、転覆した大型船の乗組員の遺体が海中に漂い、ひしめく魚の餌食となっている情景が活写されている。このような情景がシュンポシオンで使われた混酒器に描かれていることは、ホメロスの『オデュッセイア』第五歌でオデュッセウスが出会うような嵐の海での遭難が、ピテクーサイに定住したギリシア人たちにとってはきわめて身近な体験であり、それが宴席においても格好の話題となっていたことを推測させる。ホメロスの叙事詩がこの時期に急速に普及したのも、英雄たちの冒険と帰還の物語が、彼らに強く訴えかけるものをもっていたためであろう。

このように、ピテクーサイからの豊富な考古学的証拠は、波濤を越えて南イタリアに新天地を求めたギリシア人たちが、物質文化だけではなく精神文化の面でもギリシア世界の空間的拡大に貢献したことを物語っているのである。

2. 植民活動の展開

前七五〇年頃から活発化したギリシア人の西方への進出は、前七三〇年代になるとシチリア島の東岸における一連のギリシア植民市の成立となって結実した。その過程については、前五世紀のアテネの歴史家トゥキュディデスが、アテネによるシチリア遠征（前四一五ー四一三年）の経緯を叙述する際に詳しく言及している。

トゥキュディデスによれば、シチリア島に最初に植民を行ったのはエウボイア島のカルキス人であり、植民団指導者トゥクレスに率いられた彼らは、前七三四年にエトナ山の麓の岬にナクソスを建国した。その翌年、ヘラクレイダイ一門のアルキアスに率いられたコリントスからの植民団が、現在のシラクーザの旧市街にあたるオルテュギア島から先住民であるシケロス人を駆逐して、シュラクーサイを築いた。また、シュラクーサイが建国されてから五年目に、ナクソスのギリシア人たちはシケロス人と戦い、まずレオンティノイを、ついでカタネを建国した。これらの他にも、トゥキュディデスは多くのシチリア島のギリシア植民市についてその建国のいきさつを述べているが、それらはシュラクーサイの歴史家アンティオコスの失われた著作を参照して書かれており、その内容も概ね信頼に値すると考えられている。トゥキュディデスによって前七三〇年代から七二〇年代に建国されたと伝えられる植民市の最下層から、斉一的な様式の後期幾何学文様土器が出土することも、その情報の正確さを裏付けるものとみなされている。

ただし、ここで注意しておかなくてはならないのは、伝統的にギリシアの幾何学文様土器の相対編年に対応させられてきている暦年代が、シチリア島の植民市の建国年代に対するトゥキュディデスの記述そのものを基礎としているという研究史上の事実である。換言すれば、これらの都市の建国年代を、そこで出土する幾何学文様土器の年代から算定することは、トートロジーでしかない（James 1991）。考古学的証拠から確かなことは、あくまでシチリア島における一連の植民市の建国年代が、おそらく相互にきわめて近接していたということだけなのである。

ともあれ、これらの植民市はシチリア島の恵まれた環境を背景として、それぞれ富強を誇るポリスへと発展していった。なかでも、シュラクーサイは前五世紀になるとゲロンとヒエロン（一世）という僭主のもとでシチリア島の指導的なポリスとなり、前四八〇年にはヒメラ沖の海戦でフェニキア軍を破って、この島におけるギリシア人の勢力基盤を確かなものにした。その勝利を記念して建造されたオルテュギアのアテナ神殿は、現在ではシラクーザの大聖堂へと装いを変えて、古代のシュラクーサイの繁栄を偲ばせている。

比較的早い段階に成立した植民市のなかで、母市からの植民の経緯が比較的詳しく伝承にとどめられているのが、前七〇六年にスパルタからの植民団によって建国されたタラス（現在のプーリア州のターラント）である。

ストラボンが伝えるアンティオコスの著作によれば、前八世紀の後半にスパルタが隣国のメッセニアと戦った際（第一次メッセニア戦争）、スパルタ市民のうちでメッセニアへの遠征に参加しなかった者はヘイロータイと呼ばれる隷属農民身分に落とされ、遠征中に彼らの子として生まれた者もパルテニアイ（「処女の子」の意）と呼ばれて完全市民権を否定された。これを不満としたパルテニアイたちは、スパルタの重

要な聖域であるアミュクライのヒアキュンティア祭の日に、スパルタ市民側がこっそり送り込んだファラントスという人物を指導者としてクーデターを計画した。クーデターはもちろん未然に阻止され、スパルタ市民はファラントスとともにパルテニアイたちをタラスに植民させた。ストラボンは、前四世紀の歴史家エフォロスによる別の伝承も紹介しているが、いずれにしても、長期に渡るメッセニア戦争を契機としてポリス内部に深刻な対立を抱えるようになったスパルタでは、パルテニアイを遠い南イタリアに送り込むことによって問題の解決が図られたのであろう。

タラス植民の経緯で興味深いのは、植民市の建設に失敗した場合には、パルテニアイたちには帰国してメッセニアに居住することが認められていた点である。しかし、実際には彼らはこの地に先んじて入植していたアカイア系ギリシア人と協力して先住民と戦い、タラスの建国に成功した。エウセビオスによれば、タラスへの植民が行われたのは、前七〇六年のこととされている。その後、前五世紀になると、タラスは在地のメサピイ族や近隣のギリシア植民市（とりわけ前四四三年にアテネの主導でシュバリスの跡地に建設されたトゥリイ）と抗争を続けながら発展し、ストラボンによれば最盛時にはこの地域で最大の海軍を擁したと伝えられる。これらの抗争は、タラスがデルフィに奉納したメサピイ族からの戦利品（Paus. 10.10.6）や、オリュンピアに奉納したトゥリイからの戦利品（ML 57）などを通じても、後世に伝えられることとなった。

しかし、すべてのギリシア植民市のなかで、その建国の経緯が複数の史料を通じてもっとも詳しく伝えられているのは、エーゲ海の火山島テラ（現在のサントリーニ島）からアフリカの北岸に向かった植民団によって前六三一年に建国された、リビアのキュレネである。ヘロドトスによれば、その経緯は以下のようなものだった（Hdt. 4.150-159）。

あるとき、テラ王のグリンノスが百頭の犠牲獣とともにデルフィで神託を仰ぐと、アポロン神は巫女の口を通して、リビアに植民市を建設すべきことを命じた。それに対して、グリンノスは自らが既に老いの身であることを理由にあげ、そのような任務は随行している若者の誰かに命じるよう神に頼み、バットスという若者を指さした。彼らは、その時にはリビアがどこにあるのかを知らず、この神託のことも心にとめなかったが、その後テラは七年にわたって旱魃に見舞われることになり、困り果てたテラ人が神託を仰ぐと、アポロン神はふたたび彼らにリビアへの植民を促した。こうして、テラ人はようやく先遣隊をリビアに送ってプラテア島を植民先に定めると、バットスを指導者かつ王として植民団を編成し、二隻の五〇櫂船に乗せてリビアへと送り出した。しかし、彼らはいったんリビアへ向かったものの、どうして良いのか分からないまま、テラへ引き返してきた。これに対して、テラ人たちは植民団の上陸を許さず、ものを投げつけて出航を強制した。その後、植民団はプラテア島からリビア本土を転々とした後に、ようやくキュレネを建国したという。

この時代の植民のあり方を考える際に、ヘロドトスによるキュレネ植民の記事がとりわけ参考となるのは、これに対応する内容が、前四世紀にキュレネで建立された一枚の決議碑文に刻されていることによる。この碑文は、冒頭でテラ人に対してキュレネの市民権を賦与することを規定しているが、その後半部分で

は、その根拠となった植民者の宣誓が引用されている。おそらく前七世紀に遡ると考えられるその宣誓の内容は、基本的にはヘロドトスの叙述に沿っているものの、そこには植民のプロセスを知る上で注目すべき点も少なくない。たとえば、植民者の選抜について、ヘロドトスは「テラ人は兄弟二人のうち籤にあたった方が行くことにして、七つある地区のすべてから植民者を送ることを決めた」と述べているだけであるが、碑文の方では、欠損部分が確実な復元を困難にはしているものの、それぞれの家から息子を一人ずつ選び出す際の手続きの公正さと平等性が強調されている。これは、植民団へ息子を参加させることが、市民の家にとって避けることのできない義務だったことを明らかにしている。ポリスによって植民団に徴集されながらこれに従わなかった者に対して死刑と財産没収が定められていることも、リビアへの植民団の編成が緊張した雰囲気のなかで行われたことを示唆している。また、ヘロドトスの記事では、いったん船出をしながら引き返してきた植民団は、テラに残った者から冷たく追い払われているが、碑文の宣誓では、彼らはテラからの支援を受けることができないまま五年間にわたって植民市の建設を試みて果たせなかった場合には、帰国してテラ市民に復帰できると明記されていた。タラス植民の場合と共通するこのような植民団の将来に対する周到な配慮は、植民者の公平な選抜方法とともに、ポリスの総意のもとに植民を遂行するにあたって、欠かすことのできないものだったのであろう。

キュレネでは、バットスを祖とするバッティダイ王朝が八代にわたって続いたが、その最後の王であるアルケシラオス四世は、前四六二年に開催されたデルフィのピュティア競技会において、戦車競技の部門で優勝を果たした。この機会に二つの祝勝歌を書いたピンダロスは、随所でバットスによるキュレネ植民の伝承に言及しているが、このことはキュレネというポリスにとって建国伝承が大きな意味を持ち続けたことを意味している。近年、C・カラムは、キュレネ植民がピンダロスからヘロドトスを経てロドスのアポロニオスにいたる著述家によってどのように叙述されてきたのかを詳細に分析し、ギリシア人にとっては歴史と神話とが切り離せないものであったことを論じている。前四世紀のキュレネの民会決議において、はるか過去の時代に属する植民者の宣誓が引き合いに出されていることは、植民伝承のシンボリックな意義をよく示しているといえよう。

3. 東方のギリシア人

前七世紀になると、ギリシア人の世界は黒海の沿岸にまで広がることになった。この拡大の動きを主として担ったのは、エーゲ海の東岸に位置するイオニア地方の諸ポリスである。とりわけ、後にイオニアの中心的なポリスとなるミレトスは、黒海沿岸にアポロニア、オデッソス、イストロス、オルビア、ベレザン、ファシス、シノペといった重要な植民市を建設した。ストラボンは、この黒海への植民活動こそがミレトスのもっとも偉大な功績であると讃えているほどである（Strab. 14.1.6）。

これらのギリシア植民市のなかで、一九世紀末以来の考古学的調査の蓄積を通じて、その初期の状況を

詳しく知ることのできる遺跡の一つが、黒海北岸のブーク川河口地域に位置するベレザンである（Solovyov 1999）。調査の成果によれば、現在では地形の変動によって小島となっているベレザンの岬にミレトスをはじめとするイオニア諸都市のギリシア人が到来するようになったのは、前七世紀の第三四半期のことだった。そのきっかけとなったのは、おそらくリュディア王国がエーゲ海に勢力を伸張してきたことに加えて、キンメリア人やスキュタイ人のような遊牧民族がイオニア地方を寇掠したことによるらしい。しかし、これらの遊牧民族の襲来は、逆に黒海沿岸に関する地理的な情報をイオニア人にもたらすことにもなったとも考えられている。

ベレザンでは、発掘によって最初期の植民者の家屋が発掘されているが、それらは同時代のギリシアの家屋とはまったく異なり、日本の縄文時代の竪穴住居を彷彿とさせる半地下式の構造を特徴としている。これらの住居跡の多くは平面プランが楕円形で、小さいものでは三平方メートル、大型のものでも一四平方メートルほどの床面積しかもっていない。地山に掘り込まれた壁の高さは、三〇センチから一メートルほどのものが多いが、なかには二メートル近くの深い例もある。このような独特の形態の住居跡は、ベレザンでは二〇〇軒あまり見つかっており、G・ツェツフラーゼが指摘するように、イオニア系のギリシア人たちがこの地の環境に適した家屋構造を先住民から速やかに受容したことを示している（Tsetskhladze 2002）。これらの家屋から出土する土器を見ても、その約一割から三割を非ギリシア的な在地の手尽くね土器が占めていることが注目される。

ベレザンに碁盤目状に街区を配する典型的なギリシア都市のプランが導入されたのは前六世紀になってからのことであり、それとともに物質文化のさまざまな側面にもギリシア化の影響が及ぶことになった。しかし、それまでの期間にこの地に定住したギリシア人たちは、竪穴住居の採用に見られるようにスキタイ農耕種族の慣習を柔軟に摂取しながら、彼らとの交易活動を通じて植民市を発展させていったのである（篠崎 1987）。

前七世紀の後半になると、ナイルの流域に独自の文明世界を築いていたエジプトにも、ギリシア人の入植が進むようになる。しかし、南イタリアや黒海沿岸の場合とは異なって強固な王権のもとでの統治体制が確立されたエジプトに対しては、もちろんギリシアのポリスは組織的に植民団を送り込むことができなかった。その代わりにギリシア文化のエジプトへの浸透に大きな役割を果たしたのが、傭兵と商人である。

前七世紀の前半、エジプトではヌビア系の第二五王朝のファラオであるタハルカとその甥のタヌトアメンが、西アジアの大国アッシリアと抗争を繰り返していた。しかし、最終的にはアッシリア王アッシュルバニパルの侵攻の前にタヌトアメンはヌビアへの撤退を余儀なくされ、エジプトの統治権はアッシリアの息のかかった在地有力者に委ねられることになる。そのなかで頭角を現し、前六六四年にサイス朝と呼ばれる第二六王朝の初代ファラオとなったのが、幼い頃にはアッシリアによってニネヴェに幽閉され、その後アッシリアの封臣としてアトリビスの管理を任されていたプサンメティコス一世だった。

このプサンメティコス一世の即位の事情について、ヘロドトスは次のような興味深い逸話を伝えている。それによると、即位する前のプサンメティコスが他の有力者から不当な仕打ちを受けたとき、彼はブトの

聖域に使いを送って神託を仰がせた。すると、神託は「青銅の男たちが海から現れたときに復讐が遂げられる」という託宣を下した。ちょうどその頃、略奪のために航海していたイオニア人とカリア人の一団がエジプトに漂着するという出来事があった。ちなみに、イオニア人は言うまでもなくエーゲ海東部のイオニア地方のギリシア人、カリア人はその南に居住していた民族である。ギリシア風に青銅製の武具で身を固めたこの者たちを目にしたエジプト人は、それまでこのような武装を見たことがなかったので、プサンメティコスに「青銅の男たちが海から来て平野を荒らしている」と知らせた。これを聞いて、神託が実現したことを悟ったプサンメティコスは、さっそく彼らを味方につけることで、他の有力者たちを打倒することに成功したのである（Hdt. 2.151-154）。

さらにヘロドトスは、プサンメティコスがこれらの傭兵たちにペルシオン近くの土地を与えて定住させたこと、ナイルをあいだに挟んだその定住地がストラトペダ（「陣営」の意で、複数形）と呼ばれていたこと、エジプト人の子弟を彼らに預けてギリシア語を学ばせたことなどを伝えている。ヘロドトスがエジプトを訪れたのはこれらの事件から二〇〇年ほど後のことであるが、その際に彼の通訳となったのは、このときにギリシア語を学んだエジプト人の子孫だったらしい。プサンメティコスの傭兵となったイオニア人とカリア人については、リュディアの王ギュゲスによって派遣されたという伝承もあるが、サイス朝の成立にあたってギリシア系の傭兵が重要な役割を果たしたことは、おそらく史実だったと考えられる。

その後のエジプトにおけるギリシア系傭兵の活躍を伝える有名な史料が、アスワンのアブ・シンベル神殿にあるラムセス二世の巨像に刻まれたグラフィッティである（ML.7）。これは、前五九三／二年のプサンメティコス二世によるヌビア遠征に従軍したギリシア人、カリア人、フェニキア人などの傭兵の手になるものであり、ギリシア語によるもっとも長い碑文は、それを刻んだのがテオクレスの子プサンメティコスとともにナイルを遡行した者たちだったこと、この遠征軍のうち外国人部隊（ルビ：アログロッソイ）の指揮官がポタシムトなる人物だったこと、エジプト人部隊の指揮官が後にサイス朝第五代のファラオとなるアマシス（アハモセ二世）だったことなどを伝えている。

この傭兵軍の構成を知る上で興味深いのは、そこに名前が登場するギリシア系の兵士のなかに、出身地を名乗っている者と名乗っていない者が混在していることである。これは前者がこの遠征のために新たにエジプトに到来したのに対して、後者はプサンメティコス一世の時代にエジプトに定住した傭兵の子孫だったためではないかと推測されている（Vittmann 2003）。前者の出身地としては、テオスやコロフォンといったイオニアの諸都市に加えて、カリアの沖に浮かぶロドス島のイアリュソスがあげられている。このことは、エジプトへ傭兵を供給した地域が、プサンメティコス一世の頃と大きくは変わっていなかったことを窺わせる。一方で、後者のなかでもファラオと同名のプサンメティコスは、ほぼ確実にエジプトで生まれ、その名もプサンメティコス一世にちなんで名付けられたものと考えられている。

それでは、この時期にエジプトに定住することになったギリシア系の傭兵の数は、いったいどれくらいだったのであろうか。ヘロドトスは、プサンメティコス二世の子アプリエスに対してアマシスが反旗を翻した際、アプリエス王はカリア人とイオニア人の傭兵三万人を抱えていたと伝えている。一見したところ、

この数は過大なようにも思われるが、近年デルタ地方では、テル・エル・マスクータ、ミグドル、テル・エル・バラムン、テル・デフネなどで、実際に傭兵の陣営だったと解釈される大規模な遺構が見つかっている（Smoláriková 2002）。たとえば、ミグドルでは二〇〇メートル四方の範囲が日干煉瓦の壁で囲まれ、その内部からはキオス、レスボス、サモスなどで生産された液体輸送用のアンフォラが出土している。このような遺構が実在することは、この時期のデルタに外国人の傭兵を駐屯させる施設が設けられたとするヘロドトスの記述を裏付けるものと言えよう。ちなみに、テル・デフネとミグドルとは、ナイルのペルシオン支流を挟んで向かい合う位置にあり（相互の距離は約三二キロ）、これらがまさにヘロドトスの言うストラトペダだったのではないかという説も提示されている（Möller 2000）。

後述するように、すべての傭兵がエジプトに定住したわけではないにしても、前六三〇年代にテラ人がキュレネ植民を試みた際、植民団を構成していたのが五〇櫂船二隻（すなわち総数でも二〇〇人程度）に過ぎなかったことを想起するならば、この時期のエジプトにおける大量のギリシア系傭兵の存在は、ギリシア世界とエジプトとのあいだの相互交渉を著しく加速するインパクトを持っていたものと評価される。

デルタの各地にギリシア系傭兵の駐屯地が生まれた結果、エジプトには彼らをターゲットとするギリシア人の商人が活発に進出するようになった。ふたたびヘロドトスによれば、テラ人がリビアに植民しようとした際に案内役をつとめたクレタ人は、プラテア島に残されて食糧も尽きたときに、たまたまエジプトをめざして航行中のサモスの商船が漂着したために、九死に一生を得た。この船は、プラテア島からさらにエジプトを目指したものの、東風に流され続けてジブラルタル海峡を越え、スペインのタルテッソスに到達したという。結果的に、この商船はタルテッソスからの積み荷によって莫大な収益をあげることができたらしいが、この船の本来の目的地がエジプトだったことは、前六三〇年代のサモス人がエジプトとの交易に並々ならぬ意欲をもっていたことを示している。

このような動向をうける形で、やがてギリシア人商人の中心的な拠点となったのが、W・フリンダーズ・ペトリーによる発掘で名高いナウクラティスである。ヘロドトスによれば、キュレネへの介入に失敗したアプリエス王に代わってファラオの位についたアマシスの治世下で、エジプトは空前の繁栄に達したという（Hdt. 2.177）。アマシス王はエジプトに渡来するギリシア人商人をナウクラティスに定住させ、定住しない者に対しても聖域のための土地を与えた。こうして、ナウクラティスには、ギリシア系の神々を祀る聖域を中心とするギリシア人の居留地が誕生することになったのである。それらの聖域のなかでももっとも多くの参詣者を集めていたのは、イオニア系の都市（キオス、テオス、フォカイア）、ドーリス系の都市（ロドス、クニドス、ハリカルナッソス、ファセリス）、アイオリス系の都市（ミュティレネ）が合同で造営したギリシア人の共同聖域ヘレニオンだった。また、これとは独立して、アイギナはゼウス神の、サモスはヘラ女神の、またミレトスはアポロン神の神殿をそれぞれ建立したと伝えられるが、それはこれらのポリスがエジプトととりわけ密接な関係を保持しようとしたためであろう。

ナウクラティス建設に関与したこれらの都市が、前七世紀後半から前六世紀の前半にきわめて精力的にエジプトとの交易を行っていたことは、さまざまな史料を通じて知ることができる。独特の白色スリップ

地に簡素な文様を配したキオス産アンフォラは、この時期のエジプトでもっとも広く観察されるギリシア系の遺物である。サモス産のアンフォラも同様であり、サモス商人の活躍は上述したサモス商船の漂流のエピソードからも見てとることができる。このサモス商船のあげた収益に関して、ヘロドトスはそれがいかに莫大であってもソストラトスという人物が築いた富には及ばないとわざわざ注記しているが、そのソストラトスはアイギナの出身だった（Hdt.4.152）。ナウクラティスからは、「ソストラトスがアフロディテ女神に奉納した」という碑文の刻まれたキオス産の土器が出土しているが（大英博物館蔵）、このソストラトスもアイギナのソストラトスと同一人物である可能性が高い。ミレトスは、この時期にエジプトばかりではなく東地中海の各地から出土する野山羊様式の土器の産地として知られている。ストラボンは、プサンメティコス一世の時代にはデルタに「ミレトス人の城壁」という名の要塞があったと述べているが（Strab.17.1.18）、これも早い時期にミレトス人がエジプトに進出していたことの証拠である。

このように、アマシス王の治世下のナウクラティスは、エジプトにおける唯一のギリシア人商人の居留地（ルビ：エンポリオン）として繁栄した。しかし、このことは、決してナウクラティスだけがギリシア人の居住地だったことを意味するものではない。前七世紀後半から前六世紀にかけてのエジプトにおけるギリシア系遺物の分布状況は、これまで想定されていたよりもはるかに多くのギリシア人が、傭兵として、あるいは商人としてこの地を訪れていたことを示唆している。そのような文脈のもとで考えるならば、若い頃に交易で富を蓄え、前五九四年にアテネで重要な国制の改革に携わったソロンが、一連の改革の後にまずエジプトを訪問したと伝えられること（Plout. Solon 26）も、十分に首肯されるであろう。

前七世紀後半から前六世紀の前半にかけて、多くのギリシア人がエジプトで異国の習慣に接するようになったことは、ギリシア世界の文化にも変容をもたらさずにはおかなかった。彫像や神殿などのモニュメントの登場は、何よりもそのような文化交流の賜であったと考えられている。それでは、彼らがエジプトで見聞きした異文化体験は、どのようなプロセスによってギリシアに還元されたのであろうか。そのひとつの例を示すのが、プサンメティコス一世（あるいは二世）の時代にエジプトで傭兵として活躍したペドンという人物による奉納彫像である。

このエジプト産の黒色玄武岩から彫り出された高さ二一センチ、幅と奥行き一七センチの立方体の人物座像には、その正面に以下のような碑文がブーストロフェードンで刻まれている（SEG 37, 994）。

「アンフィネオスの息子ペドンが私（この彫像）をエジプトから持ち出して奉納した。このペドンに、エジプト王プサンメティコスは、その武勇に対する褒賞として、黄金の頭飾りとポリスを与えた」

この碑文は、ペドンが上述したプサンメティコス王に仕える外国語部隊の一員であったこと、彼の戦場での活躍ぶりを高く評価した王が、彼に宝飾品と都市を「与えた」（ルビ：エドケ）こと（この語句はアマシス王がギリシア人の商人にナウクラティスを「与えた」というヘロドトスの表現を想起させる）を伝えているが、注目されるのはその発見のコンテクストである。というのも、この彫像が発見されたのは、イオニアの一二市のひとつであるプリエネ近郊の洞窟だったからである。

ペドン碑文は、ペドンがエジプトで都市を与えられるほどの待遇を受けた人物であったにもかかわらず、

おそらく晩年にはギリシアに帰国して一生を終えた可能性を示唆している。また、仮に彼のプリエネへの帰国が一時的なものだったとしても、プサンメティコス二世のヌビア遠征に従軍するべくエジプトに渡った者たちの故郷が、プサンメティコス一世の時代に傭兵となった者たちの故郷と一致することとともに、エジプトに定住したギリシア人傭兵たちが、自分たちと祖国とのあいだの紐帯を維持していたことを証言するものであることは確かである。おそらく、エジプト文化のギリシアへの伝播に貢献したのは、両者のあいだを往来する商人たちに加えて、一定期間エジプトに定住した後に祖国へ帰還した傭兵たちだったのであろう。

4. 大植民時代の遺産とポリスの発展

一九九三年からM・H・ハンセンの率いるコペンハーゲン・ポリス・センターが行ったポリス研究は、古代ギリシアのもっとも重要な政治単位であるポリスに関するそれまでの通説を徹底的に再検討することによって古代ギリシア史研究に新たな地平を拓いた、記念碑的なプロジェクトとして知られている。そこで新たに明らかにされたことの一つが、ポリスの発展と植民市建設とのあいだの密接な関係である。たとえば、ハンセンによるこのプロジェクトの簡便な総括である「前古典期および古典期ギリシアのポリスに関する九五のテーゼ」の第六〇番には、以下のような知見が提示されている。

「政体としてのポリスは前七〇〇年頃に現れるが、都市センターとしてのポリスが出現するのは、前六世紀になってからのことである。しかし、エレトリア、ミレトス、メガラ・ヒュブライア、ナクソスなどでは、都市化は前七世紀の前半にまで遡る」(Hansen 2003)。

この主張には、二つの大切なポイントが盛り込まれている。一つは、政体としてのポリスと都市の形成とのあいだには、明確なタイム・ラグが存在したという点である。これは、現在では広く認められていると言ってよいであろう。しかし、より重要なのは二つめの点、すなわち早い段階で都市化を遂げたポリスが、通商や傭兵の定住を含む広義の植民活動に積極的に関与したポリス、もしくは植民市そのものであったという観察である。

このテーゼに例示された四つのポリスのうち、エレトリアは上述したように西方植民をもっとも精力的に推進したエウボイアの中心都市だった。ミレトスが黒海を中心に植民活動を行う一方で、その商人たちがエジプトへ積極的に進出していたことも、既に見てきた通りである。メガラ・ヒュブライアは前七二八年に建国されたシチリア島東岸の植民市であり、ナクソスはそのシチリアにおける最古のギリシア植民市に他ならない。

それでは、なぜこれらのポリスは他に先駆けて都市化を達成することができたのであろうか。先のテーゼにあげられた四つの都市のなかで、考古学的調査を通じてその都市景観の研究がもっとも進んでいるのが、中部ギリシアのメガラによって建設されたメガラ・ヒュブライアである。

メガラ・ヒュブライアの建国の経緯については、トゥキュディデスによって言及されている他、ポリュアイノスの『戦術書』にも比較的詳しい伝承が採録されている（Polyaenus Strat. 5.5）。それらによると、ラミスを指導者としてシチリア島にやってきたメガラ人の植民団は、まずトロティオンという地点に住み着いたが、後にカルキス人の植民団を率いてレオンティノイを建設したテオクレスに招かれて、レオンティノイに移住した。これは、ポリュアイノスによれば、レオンティノイから在地のシケロイ人を追い出すためのテオクレスによる計略だったとされるが、結局はメガラ人たちもレオンティノイから追い出されてしまうことになる。こうして、メガラ人植民団はタプソスに住み着き、ラミスの死後、シケロイ人の王ヒュブロンから土地を与えられて、ようやくメガラ・ヒュブライアを建設することになった。

そのメガラ・ヒュブライアの遺跡は、一九世紀後半からイタリアの著名な考古学者であるＰ・オルシによって発掘され、その後は在ローマ・フランス考古学研究所のＧ・ヴァレやＦ・ヴィラールらによって学術的な調査が続けられた。その結果、今日では、メガラ・ヒュブライアは前八世紀から前七世紀にかけての都市景観に関してもっとも豊かな考古学的証拠を与える西方植民市としての地位を不動のものとしている。

調査の成果によれば、メガラ・ヒュブライアでは、前八世紀に最初に入植された段階から既に、きわめて計画的な都市プランが採用されていたらしい。都市域の中心には、長辺約八〇メートル、短辺約六〇メートルの不整形のアゴラがあり、その周囲には短冊状に街区が配されていた。アゴラの形が長方形になっていないのは、その東西で街区の主軸に二一度のずれがあり、その交点にアゴラが設けられたためであるが、なぜそのようなずれが生じたのかは不明である。これにともなって、街路も直交はしてはいないものの、全体としては、個々の街区、及びそれらの街区の内部における区画は、ほぼ均等になることを意図して分割が行われたように見える。しかし、前八世紀の段階では、これらの区画には分散的に家屋が配置されていただけで、メガラ・ヒュブライアは、まだ都市としての景観を備えてはいなかった。

ところが、前七世紀に入ると、あらかじめ設定されたそれらの区画を充填するように家屋が増加し、それまでおそらくオープンな空間として聖別されていたアゴラにも、モニュメンタルな公共施設が現れるようになる。前七世紀の第三四半期に、アゴラの北は列柱館によって区画され、南西部には、評議会場と推測される複雑な構造の建築物が造営された。同じ頃、その北にはイン・アンティス型式の神殿が建造され、さらに第四四半期になると、この神殿の西により規模の大きな神殿も築かれた。機能の同定には研究者のあいだで諸説あるものの、前七世紀には、この他にも植民団指導者ラミスの英雄廟をはじめとする公共施設や祭祀の場が、アゴラとその周辺に配置されていったものと考えられている。

このように、メガラ・ヒュブライアからの知見は、前七世紀が顕著な都市化の時代だったことを明らかに示している。この時期にまで遡る遺構が、たとえばアテネではほとんど知られていないことに照らすならば、都市化という側面における西方植民市の先進性は疑いがないであろう。

メガラ・ヒュブライアに代表される西方植民市は、いずれもきわめて相互に似通った都市プランを特徴としている。現在、このような西方植民市の典型的なプランの全容を目にすることのできる数少ない遺跡

の一つが、サレルノ湾に面するポセイドニア（ローマ時代のパエストゥム）である。ポセイドニアは、前六〇〇年頃にシュバリスからの二次植民によって建設され、前六世紀から前五世紀にかけて造営された保存状態の良い三つのドーリス式神殿は、ギリシア建築史の貴重な資料として広く知られている。

ポセイドニアの都市域は、全長四七五〇メートルの城壁によって囲まれており、その中央には、約二五〇メートルの幅で南北方向にベルト状の公共スペースが設けられている。この区域のうち、その北側はアテナ女神の聖域、南側はヘラ女神の聖域とされ、前者と東西に貫通する主要道路とのあいだの長方形の空間がアゴラとなっていた。市街はこの公共スペースの東西に広がっており、幅約三〇メートル、長さ約三〇〇メートルの短冊状のグリッドによって、あたかも新興住宅地のように整然と区画されていた。

ポセイドニアで典型的に見られるような都市プランの特徴は、西方植民市では都市が建設される時点において「都市の理想的な構造」というものが植民者のあいだで共有されていたことを示唆している。それは、具体的には、城壁によって都市域を明確に限定すること、都市の中心部に公共スペースを取り分けること、残りの市街の土地を均等に分割することの三点を特徴としていた。これらは、いずれも同時代のギリシアではまだ明確には確立されておらず、おそらく植民者たちが南イタリアの新天地で直面した諸条件に対応するために独自に考案されたものだったと推測される。

まず、城壁による都市域の囲繞は、先住民の生活領域に割り込む形で建設される植民市にとっては、欠かすことのできない施設だった。メガラ・ヒュブライアのように、先住民の王の協力によって建設された都市であっても、潜在的には先住民とのあいだに緊張関係があったことは、レオンティノイとカルキス人の例が示す通りである。ポセイドニアの場合も、その領域のすぐ北にはエトルリア人の文化圏が広がっており、エトルリア人勢力との関係がポセイドニアにとって大きな課題だったことは、ポセイドニアの母市シュバリスと先住民のセルダイオイ族との同盟締結を刻した前六世紀第三四半期の青銅板（オリュンピア出土、ML10）から知ることができる。

次に、キュレネ植民の経緯にも見られるように、前七世紀までには、植民は中部ギリシアの著名な聖域デルフィでアポロン神から与えられる神託に従って行うのが慣例となっていた。これは、国家事業として半ば強制的に構成員の一部を外地に送り出すにあたっては、どうしても神による絶対的なサンクションが必要だったためであろう。植民市の建設にあたってまず神の加護に感謝するためのアゴラと聖域を都市の中心に設けるという習慣も、おそらくこのような事情を背景に成立したと考えられる。西方植民市では、クロトンのヘラ・ラキニア岬や、メタポンティオンの「パラディーニの円卓」のように、しばしば領域の周縁にも重要な聖域が存在するが、これらの聖域も、F・ド・ポリニャックが指摘するように、新たな都市を建設してその領域を画定する手段として、いち早く西方植民市で誕生したものである。

最後に、街区の均等な分割を特徴とする計画的な都市プランが創案されたのも、植民市が独立したポリスとして出発するにあたって、植民者に平等に土地を配分することが強く求められた結果と考えられる。キュレネは、三代目のバットス王の時代に、デルフィの神託を介して多くのギリシア人追加入植者を募ったと伝えられるが、その際の謳い文句は土地の分配だった（Hdt.4.159）。タラスの例が示すように、植民は

しばしば母市における待遇に不満を抱く市民たちによって行われた。また、複数の都市からの植民の場合には、なおさらそれぞれの母市における過去の身分上の諸関係を精算することによって、新たに統一的な市民団を創出することが求められたであろう。均等に区画された街区は、まさに植民市における市民団の平等原理のシンボルでもあったのである。

このように、大植民時代にギリシア文明の空間は飛躍的に拡大し、東地中海各地における植民市（及び傭兵の定住地）の建設とそれらの相互交流の活発化は、さまざまな面でポリスの発展を促すことになった。しかし、この時期、すべてのギリシア都市が植民活動に参加したわけではない。それどころか、古典期にギリシア世界の覇権を握ることになるポリスのうち、アテネとテーベはこの時期には一貫して植民活動に背を向けており、タラス植民とドリエウスによる未遂に終わった試みを除いて、スパルタも特に植民に積極的であったようには見えない（アテネやスパルタが植民を行うのは前五世紀になってからである）。これに対して、前古典期に精力的に植民活動を展開したエウボイアやアカイアの諸市は、古典期になると歴史の表舞台から姿を消してしまうのである。

この逆説的な現象を説明する鍵は、おそらくこの時期の植民が担っていた共同体の調整機能に求められる。前古典期のポリスの多くは、独立した政治単位としての自律性と一体性を保持するために、社会が発展する過程で共同体の内部に意見を異にする集団が生じた場合には、これを植民団として外に送り出すことによって問題を解決していたと考えられる。前古典期のポリスは、いわば細胞分裂を繰り返すことによって発展を持続していたのであり、ポリスという政体が各地で一応の安定を見る前六世紀の末に植民活動が終息していったことも、決して偶然ではない。

しかし、そのような共同体内部の下位集団のあいだの抗争を解決する方法は、決して植民に限られていたわけではなかった。たとえば、ヘロドトスによれば、キュレネの王家で内紛が生じた際、キュレネ人はデルフィの神託に従ってアルカディアのマンティネイアからデモナクスという名望家を問題解決のために招聘した。キュレネに来たデモナクスは、市民を出身地に基づいて三部族に分けるとともに、王権を制限して市民の権力を増大させたという（Hdt.4.161）。キュレネの場合には、結果的にはこの改革によっても内紛は鎮まらなかったが、このようなエピソードは、デモナクスが行ったような国制改革もまた、植民に代わる有効な共同体内部の調整機能を果たし得るものだったことを示している。

このように考えるならば、ソロンの改革をはじめとする国制改革を重ねていたアテネと、リュクルゴスの改革などを通じて独自の国制を確立していったスパルタとが、この時期に植民活動に乗り出さなかった理由は明らかであろう。なぜ、これらのポリスが植民ではなく国制改革という道を選んだのかという問題は残るものの、結果的には植民ではなく国制改革によって共同体内部の問題を解決したポリスこそが、古典期に強国としてさらに発展していくことになったのである。

Bibliography

Alcock, S.E. & R. Osborne (eds.) (1994) *Placing the Gods: Sanctuaries and Sacred Space in Ancient Greece*, Oxford

Bartonek, A. (2003) *Handbuch des mykenischen Griechish*, Heidelberg

Berard, C. (1970) *Eretria III: L'heroon a la porte de l'ouest*, Berne

Berlin, A.M. (2001) "Naukratis / KomHadid: A Ceramic Typology for Hellenistic Lower Egypt, in A. Leonard, Jr. (ed.) *Ancient Naukratis: Excavations at a Greek Emporium in Egypt*, Part II: 26-163

Bernal, M. (1987) *Black Athena, vol.1, The Fabrication of Ancient Greece 1785-1985*, New Brunswick

Binford, L.R. (1971) "Mortuary Practices: Their Study and Their Potential", in J.A. Brown (ed.) *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*, New York: 6-29.

Blegen, C.W. (1952) "Two Athenian Grave Groups of about 900 B.C.", *Hesperia* 21, 279-294

- et al. (1966-1973) *The Palace of Nestor at Pylos in Western Messenia*, vols. I & III, Princeton

Boardman, J. (1982) "The Islands", *CAH* III.I: 754-778

- (1994) *The Diffusion of Classical Art in Antiquity*, Princeton

- (1999a) The Greeks Overseas: Their Early Colonies and Trade, 4th.ed., London

- (1999b) "The Excavated History of Al Mina", in G. Tsetskhladze (ed.) *Ancient Greeks, West and East*, Leiden: 135-161

Burkert, W. (1992) *The Orientalizing Revolution: Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age*, Harvard

Calame, C. (2003) *Myth and History in Ancient Greece: The Symbolic Creation of a Colony*, Princeton

Carter, J.B. & S.P. Morris (eds.) (1995) *The Ages of Homer: A Tribute to Emily Townsend Vermeule*, Austin

Chadwick, J. (1976) *The Mycenaean World*, Cambridge（安村典子訳『ミュケーナイ世界』1983）

- (1990) *The Decipherment of Linear B*, 2nd.ed. Cambridge（大城功訳『線文字Bの解読』みすず書房 1997）

Cline,H. (1994) *Sailing the Wine-Dark Sea: International Trade and the Late Bronze Age Aegean*, BAR International Series 591

Coldstream, N. (1977) *Geometric Greece*, London

- (1991) "Knossos: An Urban Nucleus in the Dark Age?", in D. Musti et al. (eds.) *La transzione dal Miceneo all'Alto Arcaismo: Dal palazzo alla citta*, Rome: 287-99

Cosmopoulos, M.B. (2001) *The Rural History of Ancient Greek City-States: The Oropos Survey Project*, BAR International Series 1001

Coulson, W.D.E. et al. (1997) "Excavations on the Kastro at Kavousi: An Architectural Overview", *Hesperia* 66: 315-90

Courbin, P. (1957) "Une tombe géométrique d'Argos", *Bulletin de Correspondance Hellénique* 81: 322-86

Crouwel,J.H. (1981) *Chariots and Other Means of Land Transport in Bronze Age Greece*, Amsterdam

Davies, W.V. & L. Schofield (eds.) (1995) *Egypt, the Aegean and the Levant: Interconnections in the Second Millennium BC*, London

De Angelis,F. (2003) *Megara Hyblaia and Selinous: The Development of Two Greek City-States in Archaic Sicily*, Oxford

De Polignac, F. (1984) *La naissance de la cité grecque*, Paris

- (1995) *Cults, Territory, and the Origins of the Greek City-State*, Chicago

DeWaele, J.A.K.E. (1998) "The Layout of the Lefkandi 'Heroon'", *The Annual of British School at Athens* 93: 379-384

Deger-Jalkotzy, S. et al. (eds.) (1999) *Floreant Studia Mycenaea: Akten des X. internationalen mykenologischen Colloquiums in Salzburg vom 1.-5. Mai 1995*, Wien

Desborough, V.R.d'.A. (1952) *Protogeometric Pottery*, Oxford

- (1972) *The Greek Dark Ages*, London

- (1980) *The Greeks*, London（久保正彰訳『わたしたちのギリシア人』青土社 1982）

Donlan, W. (1994) "Chief and Followers in Pre-state Greece", in C.M. Duncan & D.W. Tandy (eds.) *From Political Economy to Anthropology: Situating Economic Life in Past Societies*, Montreal: 34-51

Drews, R. (1988) *The Coming of the Greeks: Indo-European Conquests in the Aegean and the Near East*, Princeton

Evans, A. (1921-35) *The Palace of Minos at Knossos*, vols. I - IV, London

Feuer, B. (2004) *Mycenaean Civilization: An Annotated Bibliography, Through 2002*, rev. ed., Jefferson

Finkielsztejn, G. (2001) *Chronologie détaillée et révisée des eponyms amphoriques rhodiens, de 270 a 108 av. J.-C. environ*, BAR International Series 990

Finley, M.I. (1954)

- (1957) "The Mycenaean Tablets and Economic History", *Economic History Review* 10, 128-141

- (1999) *The Ancient Economy*, updated ed., Berkeley

Galaty, M.L. & W.A. Parkinson (eds.) (1999) *Rethinking Mycenaean Palaces: New Interpretation of an Old Idea*, The Costen Institute of Archaeology at UCLA, Monograph 41, Los Angeles

Gesell, G.C. et al. (1995) "Excavations at Kavousi, Crete, 1989 and 1999", *Hesperia* 64: 67-120

- (1963) "Notes on the Amphoras from the Koroni Peninsula", *Hesperia* 32: 319-334

Hägg, R. (ed.) (1983) *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.: Tradition and Innovation, Proceedings of the Second International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 1-5 June 1981*, Stockholm

Haggis, D.C. et al. (2004) "Excavations at Azoria, 2002", *Hesperia* 73: 339-400

Hamilakis, Y. (ed.) (2002) *Labyrinth Revisited: Rethinking 'Minoan' Archaeology*, Oxford

Hansen, M.H. (2003) "95 Theses about the Greek Polis in the Archaic and Classical Periods: A Report on the Results Obtained by the Copenhagen Polis Centre in the Period 1993 – 2003", *Historia* 52: 257-282

Hooker, J.T. (1980) *Linear B: An Introduction*, Bristol

James, P. (1991) *Century of Darkness: A Challenge to the Conventional Chronology of Old World Archaeology*, London

Jansen, A.G. (2002) *A Study of the Remains of Mycenaean Roads and Stations of Bronze-Age Greece*, New York

Kantor, H.J. (1947) *The Aegean and the Orient in the Second Millennium B.C.*, Bloomington

Karo, G. (1930-33) *Die Schachtgräber von Mykenai*, München

Kilian, K. "Mycenaeans up to Date: Trends and Changes in Recent Research", in E.B. French & KA. Wardle (eds.), *Problems in Greek History*, Bristol: 115-52.

Kilian-Dirlmeier, I. (1997) *Das mittelbronzezeitliche Shachtgrab von Ägina*, Mainz

Killen, J.T. (1988) "The Linear B Tablets and the Mycenaean Economy", in A.M. Davis & Y. Duhoux (eds.) *Linear B: A 1984 Survey*, Louvain: 241-305

Knauss, J.K. (1987) *Kopais 2: Die Melioration des Kopaisbeckens durch die Minyer im 2. Jt. v. Chr.*, München

Krause, G. (1975) *Untersuchungen zu den ältesten Nekropolen am Eridanos in Athen*, Hamburg

Laffineur, R. & E. Greco (eds.) (2005) *Emporia: Aegeans in the Central and Eastern Mediterranean, Proceedings of the 10th International Aegean Conference, Athens 14-18 April 2004*, Eupen

- (1993) *Atene : Forschungen zu Siedlungs- und Wirtschaftsstruktur des klassischen Attika*, Köln

Luke, J. (2003) *Ports of Trade, Al Mina and Geometric Greek Pottery in the Levant*, BAR International Series 1100, 2003

Malkin, I. (1998) *The Returns of Odysseus: Colonization and Ethnicity*, Berkely

- (ed.) (2005) *Mediterranean Paradigms and Classical Antiquity*, London & New York

Marinatos, S. (1960) *Crete and Mycenae*, London

Mazarakis Aininan, A. (1997) *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered

- (1998) "Oropos in the Early Iron Age", in M. Bats & B. d'Agostino (eds.) *Euboica: L'Euboea e la presenza euboica in Calcidica e in Occidente*, Napoli: 179-215

- (2002) "Recent Excavations at Oropos (Northern Attica), in M. Stamatapoulou & M. Yeroulanou (eds.) *Excavating Classical Culture: Recent Archaeological Discoveries in Greece*, BAR International Series 1031: 149-178

McDonald, W.A. & G.R. Rapp (eds.) (1972) *The Minnesota Messenia Expedition: Reconstructing a Bronze Age Regional Environment*, Minneapolis

- et al. (eds.) (1983) Excavations at Nichoria in Southwest Greece, vol.3, Dark Age and Byzantine Occupation, Minneapolis

Möller, A. (2000) *Naukratis: Trade in Archaic Greece*, Oxford

Morgan, C. (1990) *Athletes and Oracles*, Cambridge

- (1994) "The Evolution of a Sacral 'Landscape': Isthmia, Perachora, and the Early Corinthian State", in Alcock & Osborne (eds.), Placing the Gods: 105-142

Morris, I. (1987) *Burial and Ancient Society: The Rise of the Greek City-State*, Cambridge

- (1996) "The Strong Principle of Equality and the Archaic Origins of Greek Democracy", in Ober & Hedrick (eds.) *Democratia*: 19-48

- (2000) *Archaeology as Cultural History: Words and Things in Iron Age Greece*, Oxford

Morris, I. & B. Powell (eds.) (1997) *A New Companion to Homer*, Brill

Muhly, J.D. (1992) "The Crisis Years in the Mediterranean World: Transition or Cultural Disintegration", in W.A. Ward & M.S. Joukowsky (eds.), *The Crisis Years: The 12th Century from Danube to the Tigris*, Duburque: 10-26

Murray, O. (ed.) (1990) *Sympotica: A Symposium on the Symposion*, Oxford

Palmer, L.R. (1963) *The Interpretation of Mycenaean Greek Texts*, Oxford

Papadopoulos, J. (1993) To Kill a Cemetery: The Athenian Kerameikos and the Early Iron Age in the Aegean, *Journal of Mediterranean Archaeology*, 6-2, 175-206

Popham, M.R. (1987) "An Early Euboean Ship", *Oxford Journal of Archaeology* 6: 353-9

- (1990) "Reflections on An Archaeology of Greece: Surveys and Excavations", *Oxford Journal of Archaeology* 9: 29-35

- (1994) "Precolonisation: Early Greek Contact with the East", in Tsetskhladze & Angelis (eds.) (1994): 11-34

- et al. (eds.) (1993) *Lefkandi II: The Protogeometric Building at Toumba*, London

- & I. Lemos (1995) "An Euboean Warrior Trader", *Oxford Journal of Archaeology* 14: 151-57

Protonotariou-Deilaki, E. (1990) "The Tumuli of Mycenae and Dendra", in R.Hägg & G.C. Nordquist (eds.), *Celebrations of Death and Divinity in the Bronze Age Argolid: Proceedings of the Sixth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June, 1998*, Stockholm, 85-102

Pulak, C. (1997) "The Uluburun Shipwreck,", in S.Swiny et al. (eds.), *Res Maritimae: Cyprus and the Eastern Mediterranean from Prehistory to Late Antiquity*, Atlanta: 233-262

Renfrew, C. (1975) "Trade as Action at a Distance", in J. Sabloff & C.C. Lamberg-Karlovsky (eds.) *Ancient Civilization and Trade*, Albuquerque: 3-59

- (1980) The Great Tradition Versus the Great Divide: Archaeology as Anthropology? *American Journal of Archaeology* 84, 287-98

- & J.N. Wagstaff (eds.) (1982) *An Island Polity: The Archaeology of Exploitation in Melos*, Cambridge

Ridgway, D. (1992) *The First Western Greeks*, Cambridge 1992

Seaford, R. (1994) *Reciprocity and Ritual: Homer and Tragedy in the Developing City-State*, Oxford

Shanks, M. (1996) *Classical Archaeology of Greece: Experiences of the Discipline*, London & New York

Shear, I.M. (2000) *Tales of Heroes: The Origins of the Homeric Texts*, New York

Smoláriková, K. (2002) *Abusir VII, Greek Imports in Egypt: Graeco-Egyptian Relations during the First Millenium B.C.*, Praha

Snodgrass, A.M. (1980) *Archaic Greece: The Age of Experiment*, London

- (1987) *An Archaeology of Greece*, Berkeley

- (1990) "Survey Archaeology and the Rural Landscape of the Greek City" in O. Murray & S. Price (eds.) *The Greek City from Homer to Alexander*, Oxford: 113-136

Solovyov, S.L. (1999) *Ancient Berezan: The Architecture, History and Culture of the First Greek Colony in the Northern Black Sea*, Leiden Boston Köln

Stampolides, N.Ch. & A. Yiannikoure (eds.) (2004) *To Aigaio sten Proime Epoche tou Siderou*, Athens

Thomas, C.G. & C. Conant, *Citadel to City-State: The Transformation of Greece, 1200-700 B.C.E.*, Bloomington

Thomas, R. (1989) *Oral Tradition and Written Record in Classical Athens*, Cambridge

- (1992) *Literacy and Orality in Ancient Greece*, Cambridge

- (1996) "Written in Stone? Liberty, Equality, Orality, and the Codification of Law", in L. Foxhall & A.D.E. Lewis (eds.) *Greek Law in its Political Setting: Justifications not Justice*, Oxford: 9-31

Traill, D.A. (1995) *Schliemann of Troy: Treasure and Deceit, London*（周藤芳幸・澤田典子・北村陽子訳『シュリーマン　−黄金と偽りのトロイ−』青木書店 1999）

Tsetskhladze, G.R. (2002) "Ionians Abroad", in G.R. Tsetskhladze & A. Snodgrass (eds.) *Greek Settlements in the Eastern Mediterranean and the Black Sea*, BAR International Series 1062: 81-96

Ventris,M.G.F. and J.Chadwick (1956) *Documents in Mycenaean Greece*, (rev.ed. 1973), Cambridge

Vittmann, G. (2003) *Ägypten und die Fremden im ersten vorchristlichen Jarrtausend*, Mainz

Wace, A.J.B. & C.W. Blegen (1916) "The Pre-Mycenaean Pottery of the Mainland", *The Annual of the British School at Athens* 22, 175-89

Whitley, J. (1991) *Style and Society in Dark Age Greece*, Cambridge

- (2001) *The Archaeology of Ancient Greece*, Cambridge

Wright, J.C. (1995) "From Chief to King in Mycenaean Society", in P. Rehak (ed.) *The Role of the Ruler in the Prehistoric Aegean*, AEGAEUM 11, 63-80

Egypt and the Aegean in the Archaic Period:
A View from the Other Side of the Mediterranean

Yoshiyuki SUTO (Nagoya University)

I Introduction

The publication of *Ancient Greek City-states* in 1993 heralded the advent of a new era for the study of ancient Greek history. Since then we have continuously been forced to reconsider the key concept of the classical Greek society, *polis*, in a most thorough and profound way through the proceedings of the fruitful conferences of Copenhagen Polis Center organized by Dr. Morgens Herman Hansen. The epistemological stand of CPC has already been explained by Dr. Naerebout at the outset of this colloquium, and is also explicitly declared by Hansen himself in a paper as follows: "at the Copenhagen Polis Center we want to know how the Greeks perceived their own settlement pattern and therefore our investigation must be based, first of all, on a careful examination of the terminology used and the site-classifications found in our sources".[1] This is a typical methodology known as emic analysis among the cultural anthropologists. According to Harris, emic operations have as their hallmark the elevation of the native informant to the status of ultimate judge of the adequacy of the observer's description and analyses.[2] Hence it is logical that the project regarded the inventory of polis in the primary sources as an important starting point for research into the concept of polis.

Yet sometimes the investigation of Hansen shows a remarkable, though legitimate, deviation from this basic principle. As is well known Herodotus notes that the number of "polis" in Egypt rose to twenty thousand in the reign of Amasis.[3] But these Egyptian "poleis", some of which are described by Herodotus in various parts of his second book, have never been considered as a proper object of the study of Greek polis. Indeed these settlements have been categorically excluded from the survey of CPC with a notable exception of Naukratis. The reason is clear enough. They are not Greek cities while *Lex Hafniensis de Civitate* applies to Greek poleis only.[4] Thus Hansen makes the following observation; "sometimes the Greek historians and geographers seem – erroneously - to have believed that barbarian towns were poleis in the political sense".[5] He even suggests that in most cases the Greek authors must have

---

I wish to thank Alexandra Villing for her stimulating response to this paper and to all participants of the First Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World for their lively discussion. Special thanks are due to Mariko Sakurai and Catherine Morgan, who jointly organized the colloquium.

[1] Hansen (1996), 9.
[2] Harris (2001), 32.
[3] Hdt. II.177.1.
[4] Hansen (2000), 173.
[5] Hansen, op. cit., 180.

applied the term *polis* to a barbarian urban centre knowing that, on the one hand, it was a nucleated settlement whereas, on the other hand, it was not a political community.[6] Elsewhere Hansen counts the occurrence of the term *polis* in Herodotus and notes that it is applied to 254 different named communities, namely 194 Hellenic and 60 barbarian poleis.[7] But this line of reasoning is quite unsuitable for strict emic approach because such term as "Hellenic polis" or "barbarian polis" was entirely alien to Herodotus or other ancient writers except for Ps.-Scylax of the fourth century.[8] If we regard certain usage of ancient historians or geographers as "erroneous", we are theoretically adopting an etic analysis by using the modern interpreter's imported conceptual apparatus.[9]

This deviation is not so anomalous since most of the historians as well as anthropologists seek to unify emic perspectives into a systematic, comparative theory of culture based in large part on etic theoretical notions.[10] But sometimes such theoretical notions may prevent us from appreciating the value of rather intriguing contemporary testimonies. At first sight the distinction between Greek *poleis* and other urban centers is so self-evident and that it needs no explanation. A Greek *polis* is both an urban centre and a political community, while an Egyptian polis, if we can imagine the existence of such an entity at all, is a mere nucleated settlement never to be denoted as a state in any sense. Most of us have believed that Herodotus used the same word for both Greek and Egyptian towns simply because he knew no other appropriate word to specify the latter. Surely it might have been the case. But is this the only possible explanation for the seemingly contradictory attitude toward the urban settlements by Herodotus and other ancient writers?

Regarding the interpretation of the large nucleated settlements in ancient Mediterranean world, serious problems concern the scholarly tendency to concentrate only to the various aspects of Greek poleis largely ignoring the political function or governmental structure of other contemporary "barbarian poleis". An Egyptian settlement of Late Period, for example, is usually conceived as an unstructured community, which was subjugated to a strongly centralized empire. It was thus a sociologically negligible unit being far from autonomous. But can we substantiate this preconception with adequate evidence? It may be true that from the economic point of view these Egyptian settlements were subordinated to a large-scale redistributive system based on heavy taxes and dues, which was certainly unknown to the Greeks of Archaic period. But there is no reason to suppose that this economic system prevented the emergence of political consciousness in the local communities in contemporary Egypt, even though the outward appearance of it was quite different from the political constitutions in the contemporary Greek poleis.

As a Greek archaeologist working primarily in Egypt for the past couple of years, I would like to explore in this small contribution the significance of the urbanization and other notable cultural changes in the Saite period in order

---

[6] Hansen, op. cit., 181.
[7] Hansen (1996), 39-41.
[8] For the Ps.-Scylax's phrase *poleis Hellenides*, Flensted-Jensen (1996), 137-67.
[9] Feleppa (1986), 243.
[10] It should also be noted that Hansen points out the necessity "to contrast a culture's perception of itself with an outsider's more detached perception of the same culture". Hansen (1996), 8-9.

to show that the nature of Greek Archaic society should not be considered in the notionally isolated space of the Greeks but in the wider context of the Eastern Mediterranean world.

II Rise of Contact between Egypt and the Aegean in the seventh century

A serious reconsideration of the early cultural relations between Egypt and the Greek world may not have special appeal for ancient historians today because of the too ardent advocacy of their connection by two influential writers, one of ancient and one of modern times.

Herodotus has been notorious for his excessive enthusiasm for barbarians since antiquity. He visited Egypt in about 459 B.C. during the first Persian occupation and it is generally believed that his descriptions were largely based on his own autopsy except for some citation from Hecataeus of Miletus. Although his fascinating narrative of various ethnographical observations has often been blamed for being too uncritical, his second book still remains the primary source for the history of ancient Egypt, in particular, of Late Period. Even though there is no need to accept literally his assertion that the Greeks adopted many religious customs from the Egyptians, it is still noteworthy that Herodotus succeeded in presenting the cultural landscape of Egypt as something fundamentally comprehensible to the contemporary Greek readers in spite of the presence of many superficial differences.

As for the controversial works by a modern advocate of Egyptian connection, the successive volumes of *Black Athena* by Martin Bernal, even the Japanese editions of which were recently published, this is surely not a place to review the validity of his minute arguments. It may suffice to say that we should still concentrate on the examination of relevant archaeological phenomena before claiming dubious, though possible, Egyptian origins of specific Greek cultural elements.

To sum up the point rather ironically, if both Herodotus and Bernal had been more moderate in stressing the supposed Egyptian influence, we would have been more positive in appreciating the importance of the multi-faceted contact between Late Period Egypt and Archaic Greece. The progress of archaeological investigations in several sites, especially in Lower Egypt, is most valuable in order to reconsider the nature of this cultural contact.[11]

The earlier regular contact between Egypt and the Aegean ceased with the collapse of the palace economy of the later second millennium BCE, and it is not until the seventh century that one can endorse its revival through archaeological evidence. Several categories of objects found in the major Greek sanctuaries, e.g. Rhodian faience scarabs from Perachora, may reflect the early interest of the eighth century Greeks in the precious Egyptian items, though many of the allegedly Egyptian objects could be imitations made and transported by the Phoenicians in fact.

It is unanimously agreed that a significant change of situation in Egypt occurred with the establishment of the

[11] Smoláriková (2002)

Saite dynasty. As is well known, Herodotus wrote that Psammetichus I, who came to throne in 664 B.C.E., relied on the Carian and Ionian mercenaries, "the bronze men from the sea", in securing the country.[12] Other sources suggest also that the Lydian king, Gyges, sent the mercenaries.[13] But irrespective of their process of coming, these mercenaries were eventually allocated land in Egypt by the king and became the first permanent Greek inhabitants in Egypt. There is no way of inferring the exact number of these Aegean mercenaries and other Greek settlers, but their decisive role in the whole historical process as well as the scale of the so-called *stratopeda* sites suggests that they became a significant demographic components at least in the Delta.

This change must have had a far-reaching effect not only on Egypt but also on the Aegean. The founding of the Greek communities gave strong incentive for the speculative Greek merchants to penetrate into the land bestowed by the Nile. Sometimes they behaved as pirates rather than courteous traders, who made raids on the settlements of native Egyptian as "bronze men" did until Psammetichus I hired them. The story of Kolaios the Samian *naukleros*, which is mentioned in the famous episode of the foundation of Cyrene, suggests that this expanded activities of the Greek merchants happened almost simultaneously with the colonial movements. I will later turn to the implication of this parallel phenomenon of the late seventh century Eastern Mediterranean.

Both literary sources and archaeological finds testify that most of the early Greek settlers in Egypt came from the eastern shore of the Aegean. Samians merchants and mercenaries were ubiquitous and the mysterious Samians whom a Persian troop happened to meet in a town of Oasis in 525 B.C.E must have been the descendants of these early settlers.[14] The Milesians were also active in this enterprise as the existence of a fortress named "Milesian Wall" on the Bolbotinian branch of the Nile suggests.[15] It was thus natural that these two poleis and Aegina, the homeland of Sostratos the richest merchant of Archaic Greece, held dominant positions among the twelve poleis participated in the foundation of Naukratis in the reign of Amasis by constructing their own temples there.[16]

Archaeological evidence also indicates that imported Greek pottery increased rather suddenly in the late seventh century. Considerable amount of late seventh century pottery of Aegean origins, including sherds of Chian amphora and that of Milesian Wild Goat II style, have been reported from such sites as Tell el-Maskhuta, Mendes, Tell el-Balamun and Naukratis. Greek imports are also attested, though not so abundant in quantity, at other traditional centers such as Bubastis or Memphis. Thus, as Haider and Smoláriková suggest, these archaeological finds show that Greek merchants of the later seventh century directed their trade activities mainly towards their compatriots, who resided either permanently or temporarily in Egypt. It has also been revealed that there were a great number of sites

---

[12] Hdt. II. 152-154.
[13] Möller (2000), 33, n.56.
[14] Hdt. III. 26.
[15] Strab. 17.1.18.
[16] Hdt. II. 178.

with a far more intensive Greek settlement than we have hitherto believed.[17]

These radical demographic changes must have affected the contemporary settlements of native Egyptians outside the Delta, too. The results of our investigations at Akoris in Middle Egypt, almost certainly one of the "twenty thousand poleis" mentioned by Herodotus, may illuminate the circumstances of a settlement in this critical period.

III Akoris in the Late Period

The archaeological site of Akoris is located some 400km south of Alexandria on the east bank of the Nile.[18] A massive rock to the south of the modern village of *Tehneh* is a salient geographical feature of this area, and a vast ruin of ancient city, which measures 600m north-south and 300m east-west, spreads on a flat plateau below it. Numerous rock-cut tombs of various periods open their mouth on the lower slope of the rock and surrounding cliff, testifying the long occupation of this strategic point in ancient times. Recently large ancient quarries were discovered to the south of the site area on the craggy range between the Nile valley and the eastern wadi.

A Japanese mission conducted the first series of systematic excavations at several points in the site from 1981 to 1993, though little remains prior to Roman times were recovered during these seasons. The only exception was the deep trench east of the Sarapeion, which yielded some Ptolemaic pottery including an upper part of an imported Rhodian amphora. Though several architectural remains in the site, such as north Chapel and Chapel F, seemed to be undoubtedly of Ptolemaic age with their characteristic decorations in Greek style, and there is also a large rock-cut inscription for Ptolemy V of the early second century, the archaeological evidence remained surprisingly scarce to corroborate the image of a thriving Hellenistic settlement gained from the philological or iconographic evidence.

It was thus our great excitement to find a large Hellenistic deposit during the excavation of large unfinished limestone blocks at the north edge of the city area in 1997. Many Hellenistic artifacts, both domestic and imported, were recovered in a burned layer, which filled the area adjacent to lower part of the stone blocks. There are also lamps and terracotta figurines in Greek style, which suggest that daily life of the inhabitants of Ptolemaic Akoris shared the contemporary cultural milieu of the Eastern Mediterranean. By far the most significant finds, however, were many fragments of commercial amphora of Mediterranean origin. The predominance of Rhodian amphora in Alexandria suggests that Akoris in the Ptolemaic period was not an isolated rural village but that it maintained active economic relations with the metropolis. As I have suggested elsewhere, it might have been the exploitation of the nearby quarry and the export of roughly processed stones that promoted the exchange of commodities between

---

[17] Haider, 1996, 114; Smolárikova, op.cit., 46.

[18] *Akoris*, 1-4; D.Kessler, *Historische Topographie der Region zwischen Mallawi und Samalut*, Wiesbaden 1981, 253-290.

Akoris and Alexandria in Hellenistic times.[19]

But the progress of excavations into lower levels revealed the presence of an extremely interesting structure. A stretch of substantial wall constructed with typical large thin mud bricks of Late Period was recovered under the sand layer below the huge limestone blocks. Though this wall had deliberately been demolished at some time between the Late Period and the Hellenistic times, its remnant must have been still visible in later period, since the nine limestone blocks found in this area were apparently placed according to the line of the wall.

The wall measures 2.1 to 2.2 m in thickness and the exposed part reached a total length of 38 m. That this wall enclosed the whole residential area is evident from the observation that it shows a slight bend to the south in the western trench. While it has already been ascertained that Hellenistic Akoris had a strong fortification wall along the city area, our investigation at the northern end of the site revealed that Late Period Akoris had also been equipped with a circuit wall.

Besides the excavations at the northern edge of the site, we have been digging at the southern slope of the massive rock since 2002, where a densely built-up area of Late Period has been discovered. A number of leatherworks and enigmatic circular structures excavated there suggest that this was not an ordinary residential quarter but a kind of workshops for leatherworkers. If our observations are correct there was already a distinct spatial differentiation of function inside the settlement area. To put it another way, Late Period Akoris was not so much a mere village of petty farmers as a strong walled city, inside which a craft specialization developed to a certain degree.

IV Urbanization in the Seventh Century Egypt

The discovery of a Late Period circuit wall in Akoris is not an isolated phenomenon. In fact not a few settlement sites in Egypt have a strong circuit wall or a large fortified area of the seventh century date. At Tell el-Balamun two mud brick enclosure walls around the temple area have been discovered, of which an inner wall is dated to the Saite Dynasty. Both two walls are reported to surround the same region of about 160,000 square meters.[20] Kom Firin is also reported to have been fortified by a relatively massive wall of mud bricks and included a citadel and a temenos. I would like to draw attention to these mud brick walls because it has sometimes been suggested that a substantial circuit wall was the sine qua non, at least in the classical period, of the Greek *poleis* that were just emerging on the other side of the Mediterranean.[21]

Surely a circuit wall of the Saite Period Egypt did not usually enclose the whole residential area but formed a sort of large square fort adjacent to the settlement itself. The most famous such fortified edifice is located at Tell

---

[19] Kawanishi and Suto (2005)
[20] Spencer (1996), 26f.
[21] Camp II (2000)

Defenneh, which is sometimes identified with one of the *stratopeda* mentioned by Herodotus. Although the majority of finds from Tell Defenneh dates to the reign of Amasis, and thus makes the equation of it with stratopeda of Psammetichus I difficult at first sight, it seems still significant that several such large forts stationed by a garrison of Greek troops were already built in the Saite period at Naukratis (the Great temenos), Tell el-Maskhuta, and Migdol (T.21). The suggestion by the original excavator of Tell Defenneh that it could accommodate 20,000 Greek mercenaries shows the extraordinary scale of these military facilities.

The above observations make it fairly clear that the establishment of the Saite Dynasty opened a period of marked urbanization. As I mentioned in the beginning, when Herodotus visited Egypt in the fifth century, his informant told him that Egypt attained its greatest prosperity in the reign of Amasis and that whole sum of the inhabited cities in the country reached twenty thousand.[22] If this information was a reliable one, such situation must not have been brought about without brisk urbanization of traditional as well as newly founded settlements. Although it is difficult to reconstruct the typical urban landscape with adequate evidence, these urban centers must have had a sacred precinct as well as a civic agora in the vicinity of it, as the description of the polis of Bubastis by Herodotus shows.

Almost nothing is known about the inner political structure of these Egyptian settlements of the seventh century. But it must be demonstrably incorrect to suppose that these urban centers were lacking for such structure at all. Despite the fact that they were politically subjugated to the Saite Dynasty, such energetic urbanization would not have been materialized without a kind of communal senses of the inhabitants of each settlement, though the nature of their political consciousness might have been quite different from that of the contemporary communities of the Aegean and the Greek mainland. Surely this may be an argument from silence, we should get rid of the preconception that only the Greeks achieved the emergence of political communities.

V Conclusion

The recent article presenting 95 theses about the Greek polis in the Archaic and Classical periods assembled by Dr. Hansen from the various papers published by Copenhagen Polis Center is decidedly the most valuable guidance for the ancient historians who are interested in this evasive concept. In his 60th thesis we read the following entry "it is commonly held that the polis as a state can be traced back to ca. 700 B.C. or even earlier, whereas the polis as an urban centre emerged as late as the late sixth century. The archaeological record, however, especially recent excavations of, e.g., Eretria, Miletos, Megara Hyblaia and Sicilian Naxos, indicate that urbanisation often took place as early as the first half of the 7th century and, consequently, was contemporary or almost contemporary with state

[22] Hdt. II. 177.

formation".[23]

This thesis comprises two critical observations. First, it suggests that sometimes there seems to have been a significant time lag between the formation of polis as a political community and that as an urban center. It implies that the emergence of a polis may not have been the result of the physical development of a local community. Secondly, it also indicates that colonial cities were not the end product of the already well-established Greek poleis but a polis emerged in the homeland and in the colonies more or less simultaneously, or even the colonies influenced the polis formation in the homeland, as Malkin argues persuasively.[24]

Having verified the standard view on the formation of Greek polis, I shall go one step further out on the limb by suggesting that the contemporary urbanization and the influx of Greek population in the Saite Period Egypt was not irrelevant to the situation in the Aegean. As has been noted above, it must be certain that the great colonial movement and the settlement of Greek mercenaries not only took place simultaneously in the northern coast of Africa but also achieved a profound effect on the indigenous inhabitants and the Greek settlers.

A dedicatory statuette of Pedon found near Priene shows that the urbanization and the settlement of Greek mercenaries had intrinsic relevance in the seventh century Egypt.[25] The inscription testifies that Psammetichus I bestowed a golden bracelet and a city (*polis*) on Pedon, son of Amphinnes, because of his virtue (*arete*). It is beyond doubt that the virtue refers to Pedon's military prowess as a mercenary leader. But what strikes us more is the expression that the king gave him a city, which is explicitly called polis. This expression may remind us of the famous episode about the foundation of Naukratis told by Herodotus that Amasis gave the polis of Naukratis (*edoke Naukratin polin*) to those who came to Egypt to live in.[26]

Since the evidence concerning the organization of the Egyptian communities in the seventh century remains still scarce, it is difficult to assess the scale of change in Egyptian society caused by this "Pan-Eastern Mediterranean Urbanization". But the introduction and swift spread of demotic in Egyptian writing system, which took place exactly in the same period, might have something to do with this current of the times.

As for the urbanization in the Aegean it may not have been fortuitous that one of the earliest settlement with elaborate town planning, Vroulia, emerged at the southernmost tip of Rhodes, the natural stopping off point on the route from the Aegean to Egypt.

The emphasis on the paradigm of "Pan-Eastern Mediterranean Urbanization" of the early Archaic period may sound a little embarrassing for the historians who are concerned exclusively with classical Greek society. But it should be reminded that no archaeologist today dare to discuss the beginning of the Greek Early Iron Age without putting the questions in the wider Mediterranean context of the 12th century. To reconsider the development of

---

[23] Hansen (2003), 274.
[24] Cf. Hansen, op.cit., thesis 89.
[25] Vittmann (2003), 203, fig.103.
[26] Hdt. II.178.2

Archaic Greek poleis also in the wider geographical context is surely both illuminating and rewarding as the other recent studies on the urban communities in the periphery of the Greek world show.[27]

[27] Keen (2002)

Select Bibliography

Ampolo, C. & E.Bresciani (1988) 'Psammetico re d'Egitto e il mercenario Pedon', *EVO* 11, 237-253.

Austin, M.M. (1970) *Greece and Egypt in the Archaic Age*, Proceedings of the Cambridge Philological Society, Supplement 2.

Bernal, M. (1987) *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization*, London.

Boardman, J. (1999) *The Greeks Overseas: Their Colonies and Trade*, 4th ed, London.

Bowden, H. (1996) 'The Greek Settlement and Sanctuary at Naukratis: Herodotus and Archaeology', *CPCPapers* 3, 17-37.

Braun, T.G. (1982) 'The Greeks in Egypt', *CAH* III/2, 2nd ed., 32-56.

Camp II, J.M. (2000)'Walls and the Polis', in P. Flensted-Jensen et al. (eds.) *Polis & Politics: Studies in Ancient Greek History*, Copenhagen, 41-57.

Cook, R.M. (1937) 'Amasis and the Greeks in Egypt', *JHS* 57, 227-237.

Coulson, W. (1996) *Ancient Naukratis, vol. 2: The survey at Naukratis and Environs*, Oxford.

Feleppa, R. (1986) 'Emics, Etics, and Social Objectivity', *Current Anthropology* 27, 243-251.

Flensted-Jensen, P. and M.H.Hansen (1996)'Pseudo-Skylax'Use of the Term *Polis*', *CPCpapers* 3, 137-67.

Haider, P.W. (1988) *Griechenland – Nordafrika: Ihre Beziehungen zwischen 1500 und 600 v. Chr.*, Darmstadt.

- - - (1996) 'Griechen imVorderen Orient und in Ägypten bis ca. 590 v. Chr.', in Ch.Ulf (ed.) *Wege zur Genese griechischer Identität: Die Bedeutung der früarchaischen Zeit*, Berlin, 59-115.

Hansen, M.H. (1996) 'POLLAXVS POLIS LEGETAI (Arist.Pol. 1276a23): The Copenhagen Inventory of Poleis and the *Lex Hafniensis de Civitate*', *CPCActs* 3, 7-72.

- - - (2000) 'A Survey of the Use of the Word Polis in Archaic and Classical Sources', *CPCPapers* 5, 173-215.

- - - (2003) '95 Theses about the Greek Polis in the Archaic and Classical Periods: A Report on the Results Obtained by the Copenhagen Polis Centre in the Period 1993-2003', *Historia* 52, 257-282.

Harris, M. (2001) *Cultural Materialism: The Struggle for a Science of Culture*, updated edition, Walnut Creek.

Harrison, T. (2002) *Greeks and Barbarians*, New York.

Kaplan, P. (2003) 'Cross-cultural Contacts among Mercenary Communities in Saite and Persian Period', *Mediterranean Historical Review*, 18, 1-31.

Kawanishi, H. and Y. Suto (2005) *Akoris I: Amphora Stamps 1997-2001*, Kyoto.

Keen, A.G. (2002) 'The Poleis of the Southern Anatolian Coast (Lycia, Pamphylia, Pisidia) and their Civic Identity: The "Interface" Between the Hellenic and the Barbarian Polis' in G.R. Tsetskhladze & A.M. Snodgrass (eds.) *Greek Settlements in the Eastern Mediterranean and the Black Sea*, BAR International Series 1062, 2002, 27-40.

Leonard, A.Jr. (1997) *Ancient Naukratis: Excavations at a Greek Emporium in Egypt, Part 1, The Excavations at Kom Ge'if*, AASOR 54.

Lloyd, A.B. (1976) *Herodotus Book II: Commentary*, Leiden.

- - - (2002) 'Egypt', in E.J.Bakker et al. (eds.) *Brill's Companion to Herodotus*, Leiden, 415-435.

Möller, A. (2000) *Naukratis: Trade in Archaic Greece*, Oxford.

Mysliwiec, K. (2000) *The Twilight of Ancient Egypt: First Millennium B.C.E.*, Ithaca and London.

Sahin, C. 'Zwei Inschriften aus dem südwestlichen Kleinasien', *Epigraphica Anatolica* 10, 1987, 1-2.

Smoláriková, K. (2002) *Abusir VII, Greek Imports in Egypt: Graeco-Egyptian Relations during the First Millenium B.C.*, Praha.

Vittmann, G. (2003) *Ägypten und die Fremden im ersten vorchristlichen Jahrtausend*, Mainz.